

翻刻『犬猫怪話』竹篋太郎』

(栗杖亭鬼卯作)

尾道大学 芸術文化学部 日本文学科

近世文学原典講讀ゼミ

翻刻『犬猫／怪話』竹篔太郎』

近世文学原典講読ゼミ

二〇〇五年度学生（主に巻一を担当）

（白水真由美 岩佐有里子 大江優子 堀井咲希 末田歩 砂場萌）

二〇〇六年度学生（主に巻二を担当）

（末田歩 砂場萌 小原紗智 中本好美 青木恵 大西華織 岸田萌）

二〇〇七年度学生（主に巻三、五を担当）

（末田歩 砂場萌 岡崎加奈 山尾恵理 青木恵 大西華織 岸田萌）

指導教員

藤沢 毅

二〇〇五年五月、尾道大学芸術文化学部日本文学科において、自主ゼミ「近世文学原典講読ゼミ」を開設した。このゼミでは、近世期に刊行された読本などの版本を読み、現行の文字に翻刻することを主たる活動としている。自主ゼミとは、大学のカリキュラムとは別個のものであり、学生がこれに参加しても単位が取れるわけではない。文字通り、学生の自主的な姿勢によって学んでいくゼミである。しかし、だからこそこの活動は尊く、本学本学科の誇りと

したい。なお、二〇〇七年度には、美術学科の山尾恵理さんも当ゼミに参加したいとの希望があり、喜んで迎え入れた。他学科の学生にも興味を持ってもらい、参加してもらえることは、当ゼミの趣旨からいっても意義深いことである。また、学問を通しての他学科間の交流という意味で、学生たちにも有意義なことであろう。

本書では、このゼミでの最初の講読作品『竹篔太郎』を公開する。この作品は文化六年序刊の読本であり、作者は

栗杖亭鬼卯である。鬼卯作の読本は、近年注目を集めており、また、公開する価値の十分あるものと思われる。

翻刻作業は、決して一文字一文字の解読作業ではない。版本であれば、誤刻もあり、印刷不鮮明の箇所、手擦れ等で読みにくい箇所もある。文意を考え、想像力をも使いなからでなくては読めない。句読点をどこに加えるか、段落をどこに設けるか、なども考える必要がある。言ってみれば、テキストを熟読していることにもなるのである。

このゼミで力をつけた学生の中には、卒業論文の制作にあたり、独力で別の版本や写本を翻刻し、考察を加える者も生まれた。末田歩さんによる『幸物語』（栗杖亭鬼卯作の読本）の翻刻は、本書と同時に公開される。翻刻の楽しさ、近世文学の楽しさ、そして学問の楽しさを十分に感じてもらえた結果と喜んでいる。また、ゼミ活動が、学科としての教育活動に結びついていることを証明したのもだとも言えよう。

なお、翻刻する底本は近世期のものゆえ、人権上問題のある表現も含まれている。これをそのまま翻刻するのは、学問上の措置としてであることをご理解いただきたい。

公開にあたって、底本の所蔵者である関西大学図書館、

またマイクロフィルム所蔵の国文学研究資料館には、翻刻の許可をいただいた。また、本冊子の作成には、二〇〇八年度尾道大学学長裁量教育研究費を請けた。この場をお借りして感謝申し上げます。

■作品梗概

【巻一】

建武二年（一三三五）、按察中納言公善（あざち きんじ）という公卿がいた。公善の娘（もよ姫）が三歳の時、乳母・橋立の娘（はせだて）が鞠垣（まがき）の中で粗相をしてしまう。橋立は、蘭を成人の後に妻にする約束で、飼犬に便を食せさせ片づけさせた。やがて約束通り蘭は犬と結ばれ、犬の子を身籠もつた。橋立は槇島兵庫という男に頼み、犬を殺させるが、兵庫も死ぬ。後に蘭は犬の子を出産。土岐家に嫁入りする百世姫のお供として蘭も四国へ行くため、犬の子を別れ去らせる。

伊予・土佐両国の太守である土岐式部少輔教道（しきぶのすけのちかみち）は、本妻久方（ひさかた）御前との間に緑之助（みどりのすけ）という男児がいた。また、教道の妾・金輪（かなわ）御前、またその連子（つれこ）の土佐丸がいた。教道が急死し、百世姫が緑之助のもとに嫁いでくるが、教道の跡

継ぎをめぐり、緑之助、土佐丸、また教道の弟である浦辺弾正が、争うこととなつた。

【卷二】

金輪御前の正体が化け猫であることを知つた蘭は、殺されてしまふ。式部少輔の旧臣・鞍手十内は与左衛門淵に化け物たちの饗宴を見るが、化け物たちは「竹篋太郎」を恐れていることを知る。

【卷三】

強盗である伊賀寿坊円海が緑之助を捕らえるが、鞍手十内によつて救われる。土佐丸は妖術を用い、浦辺弾正を自害させる。緑之助と十内は、畑次郎正勝、百世姫と合流。そこには、蘭の霊によつて遣わされた犬・竹篋太郎がいた。

【卷四】

伊賀寿坊円海とその弟・弁海は土佐丸の配下となる。都より按察中納言と安倍保清が、内侍所の御鏡探索のため、四国に下向する。伊賀寿坊のもう一人の弟であり、海賊の伊賀寿藤太がこれを襲う。保清は笹竹の占いによつて、緑之助らと巡り会う。

【卷五】

安倍保清の謀計のもと、土佐丸らの城に入った一行。化

け猫である金輪御前を竹篋太郎が殺し、鞍手十内、畑次郎正勝は土佐丸を倒す。また、土佐長岡の城の伊賀寿坊兄弟のもとへも押し寄せ、これを亡ぼす。緑之助が土岐家を相続し、伊予・土佐の両国静謐。

■底本略書誌

関西大学図書館所蔵本（中村幸彦氏旧蔵）

L 24・5・547

【国文学研究資料館マイクロフィルム（ナ2・112・3）】
半紙本五卷五冊

文化六年序刊、同七年以降印

原題簽剥落、後補書題簽摩滅

内題「犬猫／怪話」竹篋太郎」

序題「犬猫奇談」

柱題「竹篋太郎」

印記「玉留屋」

■翻刻の方針・方法

・翻刻は、序文からとし、それぞれ、（序）（目録）（口絵）（凡例）（本文）（挿画）のように示した。口絵、挿画、刊

記は図版でも示した。

・平仮名は現行の対応する平仮名に統一し、また、漢字も現行の書体に統一した。

・近世期において、多く誤用・混用あるいは慣用として使用されているものについては、その意味に合わせて置き換えた。

例 「蜜」↓「密」「斗」↓「計」

「吊」↓「弔」「脊」↓「背」

・振仮名は原本にあるものの中、現在我々が読む際に必要あるいは便利と思われるもののみを採用した。

・踊り字は、仮名単数の場合、「ㄨ」「ㄣ」「ㄣ」、漢字単数の場

合「々」、複数の場合「く」「ぐ」「ぐ」（ただし、振仮名では「く」「ぐ」で代用）に統一した。

・私に句読点や中点、「、」「、」を補い、また私に段落を設定した。

・角書は「／」に入れて、それを表した。

・明らかな誤記、誤刻も基本的にはそのままの形にしたが、そのために意味が不鮮明になる場合のみ、該当字の右あるいは下の《》に正しい字を置いた。また、文字等が欠如している場合は「」に適切な文字等を補記した。振仮名

と送仮名における衍字があった場合は、振仮名の方を削除した。卷三本文中、文章の一部が明らかに誤って重複している箇所があるが、重複箇所訂正線を引いて示した。

■翻刻

(序)

犬猫奇談序

天地者数也数者何理也理有自然分明者有不可推窮者其自然者父子有親君臣有義之類此不期然而然霄壤之曠造化之變有物則有靈及其至雖聖人亦有不知焉名之曰冥曰妙曰神曰鬼曰日鬼卯文史著犬猫奇談五卷其事幽冥怪異所謂理之不可得推明者已蓋是天地之奇数也歟其文奇巧百出愈出愈奇宛然碩匠之手段也而其所述之樞要亦不踰于賞善罰罪聖人之教人之範焉耳矣夫自古忠臣孝子守節死義之士不為不多令犬者六畜也又能自起報親之讐乃足於載之簡策以鑑戒來世之蒙孔子曾贊黃鳥曰可以人不如鳥乎吾於此畜亦云是為序

文化六年己巳春日

阿州 吉田鶴 撰

(目錄)

目錄第一

按察中納言の乳母の娘、犬に嫁する話
百世姫、土佐の国土岐の家に婚する話

土岐家騒動、畑次郎左衛門横死の話

土佐丸謀叛。三毛猫の由来の話

第二

金輪御前、蝶に戯まれて本体をあらわす

并 蘭女を喰殺す話

土佐丸、術を以て百世姫を謀る話

三雲立仙、実意を顕わして内侍所の鏡を預る話

第三

伊賀寿坊伝、縁之助危難の話

土佐丸謀て叔父大膳を害する話

鞍手十内、畑次郎正勝に逢ふ。竹篋太郎が話

第四

伊賀寿坊兄弟、土佐丸が味方となる話

按察中納言、安倍保清、伊予に赴く。伊賀寿藤太が話

安倍保清、畑次郎に逢ふ話

安倍保清、縁之助に秘計を示す話

第五

宇和島唐物屋佐右衛門が子息佐太郎、桜狩に出て怪異に逢

ふ話

畑次郎、安倍保清を捕へて宇和島に赴く話

安倍保清、土佐丸が術を折く。竹篋太郎、母の仇を復する話

土岐縁之助、再び両国を収む。内侍所の御鏡、都へ入ら

せ給ふ。伊与の猫塚の話

（口絵1）

有知有勇 艱難飽嘗 顯然名姓 竹篋太郎

土佐丸 朋来主人題 鳥信

土岐縁之助 彈石挫人 有力如虎 雖能制之 一時跋扈

韓橘処士 鳥服

伊賀寿坊円海 鞍手十内

（口絵2）

魔殺香閨女 猫靈尚怪哉 慈父得黄耳 如牛復讐来

葛跛題 鳥服

鳥服

鳥服

鳥服

鳥服

鳥服

鳥服

鳥服

鳥服

鳥服



□ 絵 1



□ 絵 2

畑次郎正勝

名犬竹籠太郎

真葛原した這ありくのら猫のなつきかたきは妹が心よ

百世姫

怪猫土岐俊室

(凡例)

凡例

四国に竹籠太郎てふ犬ありて、妖魔を退治せし事、色々の説ありて、其実をしるものなし。頃日、京摂及東都の諸名君、各々筆を揮ふて復讐の種々、古きをもて新らしき作を出し給ふ。中に独、此竹籠太郎は、犬の復讐にして、諸名家の粕を喰わず、真の竹籠太郎なるものならんと誌すは、

栗枝亭鬼卵にぞありける

(本文)

「犬猫／怪話」竹籠太郎巻之一

栗枝亭鬼卵述

按察中納言の乳母の娘、犬に嫁する話

『後漢書』に曰、「昔、高辛氏の時、犬戎国したがわす。

征伐すれども勝事あたわず。因て天下に触れて、『犬戎の

大将呉將軍を殺すものあらば、黄金千鎰、邑万家、又、

少女を賜ふて妻とせん」と宣ふ。時に毛の色五彩なる犬

あり。槃瓠と号く。此犬一ツの首をくわへて禁庭に躡る。

群臣異んで是をみれば呉將軍が首なり。帝大に悦給ふ。

然れども是に妻すに女をもつてしがたし。又封爵の道な

し。いかにして報ぜんと僉義区(補画一)高辛氏(のこじ)

なるところに、御娘聞給ひ、『皇帝既に詔を下す。再

び変ずべからず。我行ん』と仰ありければ、帝已事を得

ずして姫君を槃瓠に妻し給ふ。槃瓠、女を得て負て走り、

南山石室の中に入りぬ。人跡絶て在所をしらず。三年を経

て六男六女を生り。因て自夫妻となる事をしる。其母、

後に此由を帝に告たり。是にて諸子を迎へて見たまふ

に、言語分たず。郷里に住ことを嫌ひ、山壑に入ことを好

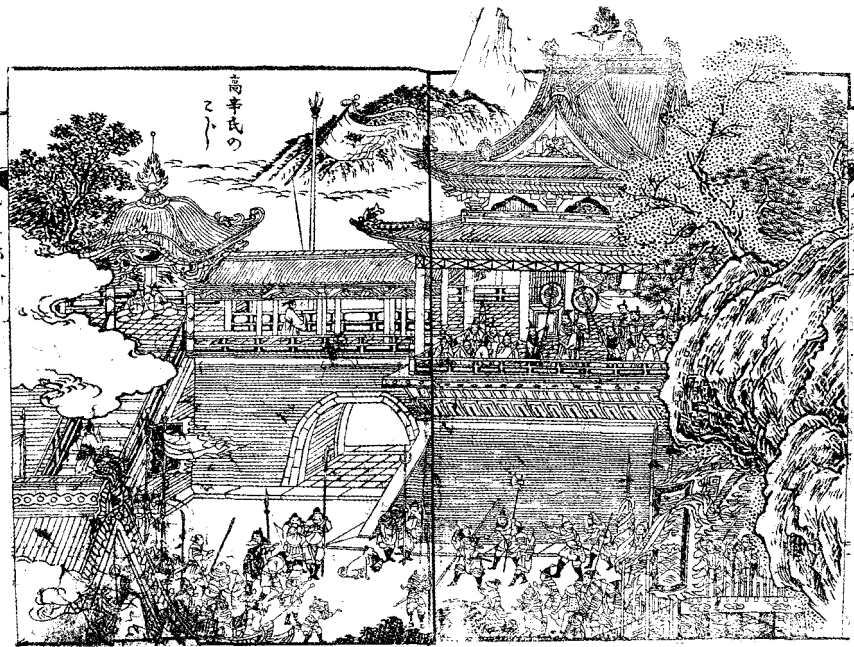
む。帝、其意に随ひ、名山広沢を賜ひ、今の長沙武陵

の蛮、是なりとぞ。

我日の本にも是に均しきことあり。建武二年の頃なりけ

るが、平安城に時めきて任たまふ按察中納言公善卿とてお

はしける。姫君一人出生まませば、掌中の珠ともて



挿画 1-①

はやしたまひ、乳母橋立とて心さかしきをうなを付置給ひけるに、此橋立にも女子一人あり。名を蘭といひて、姫君とおなじ年にありければ、是をも育させ給ひける。此姫君三才と申せし頃、橋立は縁の傍にありて、姫に乳をまいらせけるうち、娘のらんはやうく独歩行する頃なりければ、庭において遊びけるに、いつの程にや鞠垣のうちに入りて、おさなき者のならひ、鞠垣の沙へ尿をなしける。橋立見て『あわや』とおもへども、姫君のはなち給わねばせんすべなし。折から公善卿、其外の公卿、鞠遊ばさんと杵はき給ふ音のしければ、橋立はいと胸うち騒ぎ、『なにとぞ早く此不浄を取除ん』と思ふに、ひたすら姫の取付給ひぬれば、動く事あたはず。傍に手飼犬の快く臥たるを見て、

「やよ、白よ。あの鞠垣のうちなる糞をくらひ、不浄を清めなば、我娘成人して後、必、汝が妻にやらん」といひけるを、聞て一さんにかけて行、糞を悉く喰ひ尽し、沙かきならしかへりけるうち、中納言殿、其外の公卿も垣にいらせ給ひて、数そふ鞠に御遊をまし、其日の暮に各座敷に入給ひ、興じさせ給ひけり。

扱、星霜推移りて、姫君百世のかた十六才にならせ給へ

ば、娘のらんも同年にてうつくしく生立、姫君の御伽役をぞ勤ける。此年、蘭、不思議の病をぞ受ける。夜毎に心乱れ、足手を空さまになし、口ばしりけるは、

「我に不浄を喰わせ、約を違へぬることの恨めしきよ。いかに此恨を晴さで置べきか。此娘をとり殺しぬるうへ、母をもおもひしらさん」

と狂ひ罵るありさま、母橋立は見るに忍びず、貴僧高僧を請じ祈りを受ぬれど、其しるしともあらず。百世姫は猶更、御心に叶ひし蘭がいたつきに心を痛め給ひ、父君にもかくと告給ひて、さまざま、医療を尽しぬれど、せんすべき手だてもなく、次第に頼すくな見へければ、母は病のひまあるときに枕辺に寄添ひ、娘に言けるは、

「思へば十三年以前、手飼の白犬にかく／＼のことをいひて、汝が糞を喰せしが、我は只仮初の戯とこそおもひしに、畜生の執心深く、かくなやませぬるとは思へども、汝を畜生に妻せんことの悲しき、今までは言わざりしが、かくては命もあるまじければ、言聞すぞや。汝を取殺し、猶此母へも仇せんといふなれば、夫連も前世の業因とあきらめんが、姫君の御事のみ心にかゝるぞや」と、泣々往じことども語れば、らんは大に驚き、

「扱々、左様のことに侍るにや。わらわが命は露計も厭ひはべらねど、母上、姫君の御身の上こそ心にかかり候。縦令此儘に果候とも、未来永々畜生道のくるしみを受なんは必定なり。左あらば、現世の母上の御心をやすめ、永く姫君に忠を尽さんこそ本意なれ。わらは犬の妻とならば、三方四方の悦、此上やあるべき。忠孝の為に身を犬に任せ申さん」

と、涙ながら言ければ、母は猶更かなしく、「我一言の戯より娘一人を畜生道に沈ることよ」と伏沈ば、蘭は居直りて、

「左宣ふは断ながら、昔帝王の姫君すら槃瓠とかやいへる犬に嫁したまふと伝へ承る。必々歎給ふな」と言慰むるうち、病は夢の覚たるごとく平愈しける。

其夜、丑満の頃、白き衣着たる若さ《き》男、らんが枕辺に來り、

「御身、わが執心を仇になさず、得心ある事、返す／＼も嬉しけれ。けふよりは長く契を結ぶべし」

と、夫よりは夜毎に通ひける。らんも初の程はうるさく悲しく思ひしが、馴染ては中々にいとほしく、わりなき中となりけるに、いつしか腹ふくらかになり、岩田帯の長き

思ひに沈ける。母橋立も此ことをしりて、畜生の種をやどしぬることをかなしみ、隠すとすれど、袖にもる月にぞとなりける。

此中納言の雑掌に槇島兵庫とて色好なる男あり。此蘭が粧ひの美なるに心うつりて、さまざまといひよりぬれど、かゝることの有れば答もせでありけるに、いと心乱れ、今は詮方なく、母橋立にあひて、らんを婦妻にもらひたきよし言入ける。橋立、兵庫が心をさまざま様見て、密に兵庫を招き言けるは、

「娘に御執心の趣、偽わりに侍らずば、物語申子細あり。他言あるまじきや」

といひければ、兵庫大に悦、金打して他言すまじき旨を誓ふ。橋立、

「娘が病により犬に身を任せ、今は只ならぬ身となりたり。御身、娘に執心ならば、かの犬を人知らず打殺し給ふべし。左ある時には、娘を御身にまいらすべし」

と、始終りつばらに語りければ、兵庫も大に驚けれども、一旦言出せしことなれば、今更いなみがたく、

「成程、畜生一匹うち殺すこと、何の手間いらす。去ながら娘御の心はいかん」

母いへらく、

「娘には申さね共、かくはからひ給わらば、などで娘もいなむべき。その段は此母が請合ふべし」

といひけるに、兵庫も心悦び、彼白犬をぞ伺ひける。(挿画①②「兵庫、犬を害して、忽ち身を亡す」)

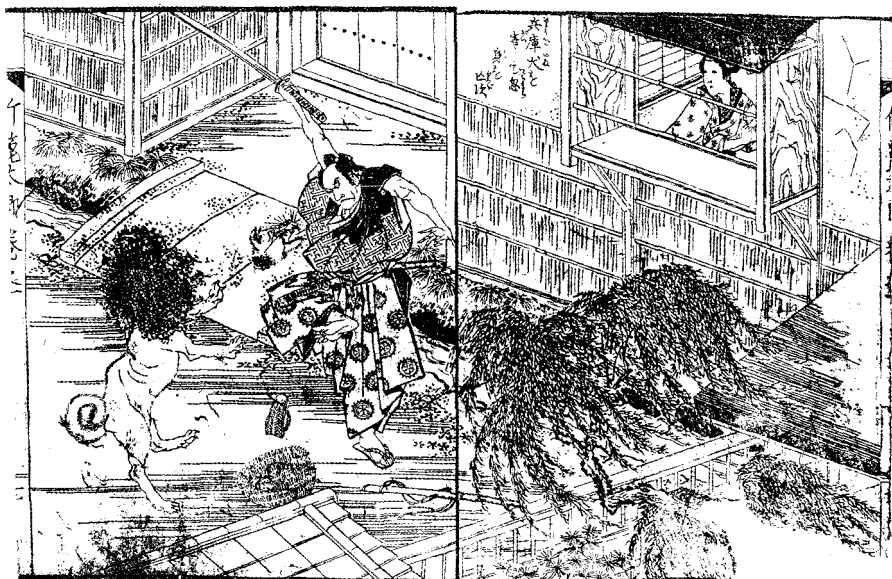
かくともしらず白犬は、夜毎にらんがもとへ通ひけるゆへ、昼は築地の傍に正体なく伏けるを、兵庫刀を抜きばめ、伺ひより、犬の首を水もたまらず打落せば、不思議や、此犬の首飛上り兵庫がのんどに喰付ける。兵庫も仰天して手をもて犬の首をはね除んとするに、終にはなざす、兵庫をくらひ殺しける、執心の程こそ恐しけれ。

百世姫、土佐国土岐の家に婚する話

爰に伊予土佐両国の太守、土岐式部少輔教道とておはしける。其先祖を尋るに、聖武皇帝の御宇、正四位下清原教房にてぞありける。此時、南都東大寺建立ありける節、教房の領国宇和の金山より黄金数多掘出し捧らる。其時、

すべらきの御代栄んと四国なる

宇和の島根にこがねはなざく



挿画 1-②

此一首、達^{たつし}、^二劔聞、御感^{ごかん}のあまり其歌を宸翰^{しんかん}に遊^{あそ}ばされ給^{たま}りける。是、家の面目^{めんぼく}なりとて、代々^{だいでい}家督^{かとく}の節^{せつ}は劔覽^{けんらん}に備^{そな}へける。是のみならず、弘法大師^{こうぼうだいてし}の真筆^{まひつ}の光明真言^{くわうみやうしんごん}、天国^{てんごく}の小劔^{せうけん}、隱形^{いんけい}の劔^{けん}、此三つをもて天聴^{てんてい}に達^{たつ}し、代々^{だいでい}將軍家^{しやうぐんけ}の幕下^{まくか}におらず。夫^{つま}ゆへ公卿^{こうけい}、殿上人^{てんじやうじん}より婚^{こん}をなす家格^{かかく}なり。

此^{この}式部少輔殿^{しきぶせうぶとの}に御子^{みこ}二人まします。本妻^{ほんさい}久方御前^{くわがたごぜん}の御腹^{ごはら}に、縁之助^{えんのすけ}とて当年十七才^{ねんじゅうしちさい}に成^なたまふを、土佐^{とさ}の本城^{ほんじやう}に育^{そだ}たまふ。又、伊予^{いよ}国^{くに}宇和島^{うわじま}の城^{じやう}に、御妾^{ごめかけ}金輪御前^{かんなのりごぜん}とてまします此御方^{せんかた}は、やごとなき人の御台所^{みだいどころ}なりしが、夫^{おつと}身まかりたまふて、後、一子^{いっし}土佐丸^{とさまる}を連^{つれ}て式部少輔^{しきぶせうぶ}どの、御部屋^{ごへや}となり、伊予^{いよ}の台^{だい}に住給^{すま}ひける。

其頃^{そのころ}は南朝北朝^{なんていほくてい}とはわかりぬれど、足利尊氏^{あしかがたかあき}、征夷大將^{せいゐだいていしやう}軍に任^{まか}じ、専ら權^{けん}をとりたまふ世の中なれども、此土岐^{このとぎ}の家^{いへ}は代々^{だいでい}公家^{こうけ}の支配^{しはい}にて家督^{かとく}相統^{さうと}ありける。

ある時、式部少輔^{しきぶせうぶ}どの、伊予^{いよ}の国^{くに}に到^{いた}りたまひ、鷹狩^{たかとり}の帰^{かへ}りに、金輪御前^{かんなのりごぜん}の御部屋^{ごへや}に入^いらせ給^{たま}ひ、御酒宴^{ごしゆゑん}ありけるに、其曉^{あけ}より心神^{しんじん}惱乱^{なうらん}し給^{たま}ひ、人事^{じんじ}を分^{わか}ちたまわねば、家中^{いなか}の騒動^{さわどう}大^{おほ}かたならず。早速^{さつそく}土佐^{とさ}の本城^{ほんじやう}長岡^{ながおか}へ帰^{かへ}らせ給^{たま}ふ。此^{この}とき北^{きた}の方^{かた}久方御前^{くわがたごぜん}は三^{さん}とせ以前^{いぜん}に身まかり給^{たま}ひ、

若殿緑之助どの計にておはしける。早速家老畑次郎左衛門正元を枕辺に召呼び給ひ、

「我病、旦夕にせまりぬれば存命かなふべくもあらず。

緑之助に家督相続のこと、汝宜はからふべし」と

と仰ありければ、次郎左衛門慎んで、

「御誼のおもむき畏り奉るといへども、伊与の国には土

佐丸どのもおはしまし候へば、御家督違乱無之様、御遺書

頂戴仕度」旨述べれば、うなづかせ給ひ、

「されば、我つらく家のことをおもふに、我弟浦辺

弾正、土佐島に分地を遣し置、天国・隠形の劍を預

しに、其劍、盜賊の為に奪はれしと届たり。これ不審と

おもふに、伊与の国金輪、連子鱒五郎を土佐丸と名乗せた

き願。是まつたく家國を望む下心ならんと心付しゆへ、

預置し大師真筆の光明真言を三雲立仙といふ偽筆の名人

に写させ、寸分違わず修復させ、似物を渡し置しが、は

たして我病、彼等に毒害せられしと覚ゆるなり。我両肘

とたのみたるは汝と較手十内なりしに、われあまつて三

の宝を三所へ預んといひしを強く諫言せしに、我これを

聞入ず、却て怒りけるを憤りけるが、国遠して行衛し

れず。何とぞ彼を尋出し、ともぐ緑之助に力を添、家

督相続なしくれよ」

と、大師の真筆を次郎左衛門にわたし、料紙、硯をとり寄

たまへども、筆もちたまふこと叶わず、終に黄泉の旅に

赴き給ふ。次郎左衛門このことを深く隠し、大殿御病氣

に付、かねて言号の按察中納言公善卿の姫君を急に迎へ

まいらせ、婚姻相整し上にて、殿の逝去を披露せんと、

緑之助どの、次郎左衛門兩人の外しるものなく、配膳ま

でも常の通りになしてありければ、家中の面々も御病氣と

のみおもひ居ける。夫より京都中納言殿へ御興入を急ぎ申

遣しける。

此時、京都按察中納言どの御娘百世姫と申は、当年十六

才にならせ給ひ、嬋娟たる御粧、まことにいにしへの

衣通姫、小野小町といへども、これに増るべしとも思ほへ

ず。乳母橋立が娘らんもいとうつくしく生立しが、いつぞ

や犬の種をやどしけるに、母これを敷き、横島兵庫をかた

らひ、終に犬を殺しけれども、兵庫も即座に犬の為に殺さ

れける。娘このことを聞て深く歎き、始はつらかりし契

さへ、今は中々其梯の忘れず、殊に只ならぬ身となり

ぬれば、一しほ心細く暮しぬるに、程なく安産し、黒白

斑の犬をぞ産だりける。橋立も産所に來り、此犬を見て

大に驚き、「人のしらぬ間に早く殺せよ」とあせれども、流石恩愛にて殺しもやらす、剩、乳房をふくめ人しらず養ひ置けるに、此度土佐の国より姫君の御輿入を急がれ、近々御輿入あり。橋立、らん女もかい添女に召連給ふとのことなれば、らん女は犬に歎き、かの犬に乳房をあたへ、涙ながらいひ聞しけるは、

「我、業因ふかく、汝を産みて殺すに忍びず、捨もやらす、今日までは育しが、此度姫君の御供して四国へ下るなれば、汝に乳房をあたへんも只今限りなり。是より何方へも立越、成長すべし。必々此御館の御恩を忘るゝことなかれ」

と、涙ながら言聞ければ、此犬、人間の如く手をこまぬき、涙をながし、らんにしなだれよりしが、一声叫んで何国ともなく出去けり。母は猶更いとおしく、名残おしく見やれども、(挿絵1-③)「蘭女、世のわかれをかこつ」行方なければ、なくく、此ことを橋立に語りければ、母は大に悦び、「汝が足手まどひを払ぬることの嬉しさよ」
と、姫君の御供して土佐の国へぞ赴きける。

土岐家騒動 畑次郎左衛門横死の話



挿画 1-③

かくて京都按察中納言公善卿の姫君、土佐の国へ入興ありければ、在京の大名に羽州山形の城主、佐竹大炊之介勝成、土岐家の縁家なれば、中納言どのの御頼に寄り御添添としてまかり下られけるよし隠れなければ、土佐島の領主浦辺弾正、伊与の旨より御部屋金輪御前も来りたまひ、殿の御容体を直に伺わんとあれども、家老畑次郎左衛門、是を止め、

「殿、ちか頃、人に應對し給ふことを嫌ひ給へば、今暫く御快あらせられて御目見あるべし」

と差留るうち、京都より御輿入あり、付添として佐竹大炊之介、姫君に引添打通り給へば、緑之助どのはじめ、一家中迎まいらせ、遠路心配の挨拶こと終り、姫君、緑之助婚々の盃納りければ、伯父彈正不興氣に、

「兄人、事をわかち給わずとも、一族の大炊之介どのも遙々下向のことなれば、いかで対面なくて叶ふべからず。いざ此所へ同道せん」

と、立上るを、次郎左衛門押留、

「叔父の仰、御尤には候へども、かく晴々しき御席へ病床の御姿にて御対面あらんこと憚なきにしもあらず。まづ一日を追て御快方に赴き給ふせつ、嫁君御対面然

るべし」

と、ひたすら留るを、聞ず顔にふり離し、寝処の襖さと押開けば、大殿はましまさず、位牌に香花のみなれば、彈正はじめ大炊之介も大に仰天したりける。次郎左衛門涙を押ぬぐひ、

「大殿には先月十六日逝去ましませども、何卒若殿緑之助のに御婚礼を、整、其上にて披露せんと、拙者一人の了簡にて今日まで押包候ひしに、叔父君の遠慮なき御計ひゆへ、かく露頭の上は是非に及ばず。何卒緑之助どのへ家督相続あるやうの御執成、偏に願奉る」

と、大炊之介に誠心を頭わし願ひければ、金輪御前は心にしたり貌ながら、上へには大に驚しさまにて打敷き、

「かゝることのあらんはしにや、日外伊与へ来り給ひし時、『緑之助は懦弱者にて中々兩國の主になるべき人物にあらず。土佐丸こそ器量備りし若者なれば、我死て後は兩國の主は土佐丸たるべし』と、直筆の遺書を残し給ひしも、昔語りと成たるかや」

と、正体なく伏沈み給ふ心の中こそ恐しけれ。叔父彈正頭をふり、

「いや、金輪御前の申さるゝこと大に相違せり。尤

土佐丸、才智勝れたれども、其元の連子にて土佐家の的伝にあらざ。又、緑之助は多病懦弱にして大國の主になるべき者にあらざ。左すれば式部少輔が眞の弟は我なれば、暫兩國を預り、緑之助が心底を見定めし上、家督を渡すべし」

と、居丈高に成ていひければ、金輪御前氣色を正し、「こは叔父の仰とも覺へず。堯は舜に天下を譲り、舜は臣下の禹に天下を譲りたまわずや。是皆、匹夫をさへ取立て、國をたもたん人を撰び給ふならずや。まして土佐丸は連子ながらも土岐を名乗、土佐丸と名付給ひ、殊に大殿直筆の遺書あれば、いかで違背あるべき」

と、赤やかに貌なして宣へば、次郎左衛門、大に驚き、「御両所のあらそひ僻事と存候。其故は大殿、緑之助との家督相続あらせんと思召はこそ、京都中納言どのより御縁を組まれ、今日輿入ならずや。土佐丸殿に家督を譲らんと思召ば、姫君を土佐丸殿に婚姻あるはずなり。其御直書いかにしても覚束なし」と言ひければ、金輪御前、大に怒り給ひ、「やよ次郎左衛門、舌長なり。汝、大殿の手跡はよも忘れまじ。是を見よ」

と、懷中より差出たまへば、弾正もろとも打寄て開き見るに、大殿の手跡にまぎれなし。「こは如何に」と次郎左衛門、緑之助も忙れ果たる計也。大炊之助は最前より黙してありけるが、

「後室、式部少輔直筆の遺書を以て家督相続と申さるゝこと尤也。又、次郎左衛門が、按察家婚姻を以て大殿緑之助に家督させん存念とのこと、是又いわれなきにもあらず。浦辺どの的伝の叔父なれば後見せんとのこと、是もつて理の当然なり。しかし、此土岐の家督相続の旧式は、金花の短冊、隱形の劍、大師の眞筆、三品叡覽にそなへ終て家督相続仰付らるゝ旧格なり。此三の宝揃ひ持参の人こそ、兩國の太守なるべし。次郎左衛門、此三の宝、緑之助殿方にありや」

と明智の詞に、次郎左衛門恐入、「此三の宝は、土佐島、伊予、土佐、三所へ大殿の代に預け玉ひ、金花の短冊は当宝蔵に納、隱形の劍は伯父御彈正殿あづかりたまひ、大師の眞筆は伊予の宝蔵に納め、則土佐丸并金輪御前の預りにて候」

と言にぞ、大炊之介眉をしわめ、「かゝる大切の宝を三所にさしおく式部少輔の所存いぶか

し。所詮三ツの宝、一ツ所へ集め、神慮に任せ圖を以て
家督を定めらるべき歟」

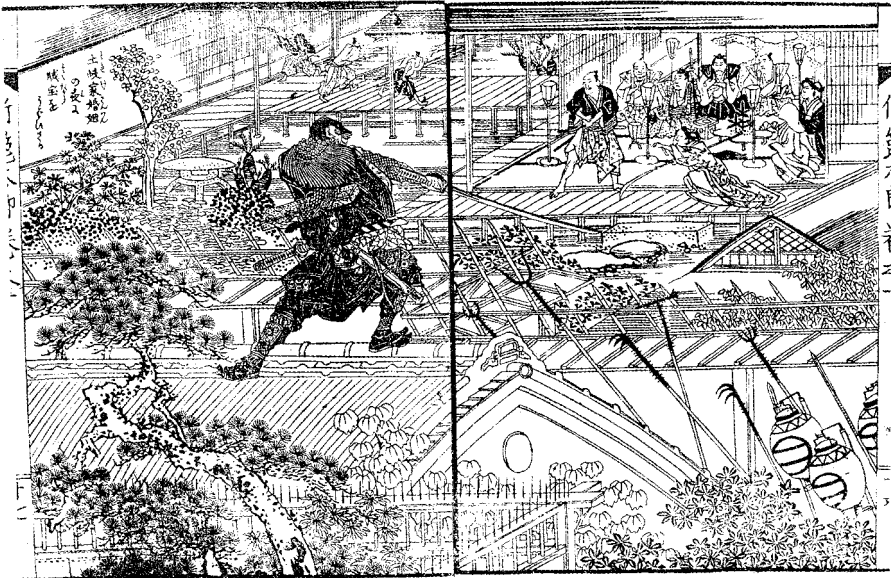
とありければ、彈正頭をかき、

「其ことにて候。去年虫干の節、かの劍を床の間に飾り置
候処、何者ともしれず、此劍を奪ひ立退候。追掛候へども、
此劍の徳により形を隠し候ゆへ、空しく奪ひとられ、今
に有所を知らず候」

とい、も終らぬ所へ、あわたゞしく侍一人立出、

「只今宝蔵へしのび入り、金花の短冊をうばひ取、立退候
者有之ゆへ、追々人をつかはし捕んと仕候に、中々手に
余り候」

といひ捨て、引かへしければ、次郎左衛門大に仰天して、
「すは、御家の一大事」とも、立り、敷取て、裏門の方
へ馳行ければ、緑之助も跡に続く追かけける。かくて彼
曲者は金花の短冊の箱を口に（挿絵）④「土岐家婚姻の夜に、賊
宝をうばひさる」くわへ、多くの人を切はらい、宝蔵の屋根
より高塀へ取付き、飛下りんとする所を、待もふけたる次
郎右衛門、長柄の鎧をもつて、「曲者逃すまじ」と突出す
鎧、太股をぐさと突を、手煉の曲者つかねながら、其柄を
もつて飛下ると見へけるが、割かうがいを次郎左衛門が



挿画 1-4

咽へがばと手裏剣をうちこみ、鎗引しごき、何国ともなく落行ける。「口惜しや」と追かけんとするに、急所の痛手なれば目くるめき、尻居にどうと倒るゝ処へ、緑之助も追かけ来り、此体を見て大に仰天し、「何者の所為なるにや」と声立んとし給ふを、次郎左衛門押釐め、声をひそめ、「一人貪戻なれば一國乱を作すとは聖人の金言。大殿故なくして宝器を三所へ分ちたまひしにより、かゝる大事の出来ぬるは、是非なし。我、三の宝を詮義して、君を御家督になし奉らんと、心は矢たけにはやれども、急所の痛手なれば中々存命叶ひがたし。悴次郎正勝、所存ありて勘当し、今は民間にありと承わる。同役鞍手十内、忠臣無二者なりしが、彼宝三所へ預けたまふを深く諫言し、聞入たまわざるゆへ、身を引、国遠して今に行衛しれず。彼此世にあらん程は御家の柱石なり。われ死後、君此所におはしまさば、後室、弾正どの両人の悪計に落入、御命危し。是より直に何方へも立退、十内并悴次郎に廻り逢、御家再興を計り給へ」と、懐中より一卷をとり出し、

「大殿、金輪御前の心底をいぶかり、宝を三所へ預給ひしを後悔ましましてしにや、去ル頃、伊与にて大師の一卷

を偽筆させ、宝蔵に収め給ひ、真筆を我に預給ふ。此一巻、肌身をはなし給ふな。君の守りとなりて危き難をも逃れ給ふべし。此偽筆せし者は三雲立仙と承る。大殿の遺書の偽筆も、全く此者の所為ならんか。心長く糺し給へ。返すへも我、此所にて死ん事の残念さよ。たとへ死とも、一念は君の陰身に添て守りまいらせん」といひ終つて、ついに空しくなりにけり。緑之助どの大に歎き、

「われ、いかなれば、かゝる忠臣を目の前に殺すことのかなしさよ。我、此館にありなば、いかなる憂目にや逢なん。次郎左衛門が諫に随ひ、是より直に立退、兩人を尋ぬべし。しかし、今宵婚禮せし百世姫、我をしたはん。不便や」と、やゝ涙ぐみ立給ひしが、一卷押戴き、肌に納め、「かくては人や咎めなん」と立ち出たまひけるが、立帰つて、次郎左衛門が咽にたちし割かうがいを引抜、次郎左衛門が片袖引切り、押包み、何国ともなく落行給ひける。

館には、「次郎左衛門が横死。若殿、何国へか落給ひし」と聞より大に騒立、所々へ迫人を出しければ、姫君の歎大かたならず、ともに館を立出、緑之助どのの行衛を尋んとかけ出給ふを、乳母橋立、らん、ともかく押留、

「所々へ追人の出ぬれば、御帰あらんは必定なり。必、はやり給ふな」

と、さまざますかしぬれば、弾正したり貌にて大炊之介に向ひ、

「緑之助、館の騒動をぶり捨、国遠いたす程の不覚者、家督相続思ひもよらず。我等後見願ひ奉る」

といはせも果す、金輪御前、

「大殿直筆の遺書ある上は、土佐丸に家督ねがひ奉る」

と、両方のねがひに、大炊之助打うなづき、

「両人の願もだしがたく、百日の間に三ツの宝を尋出し、持参あるかたに家督相続あるべし。また百世姫は、婿

緑之助国遠の上は、京都へ伴ひ帰るべし」

とありければ、百世姫なく、

「婦人は夫の家に至り、ふた、びかへるを恥とこそ承る。

縦令、緑之助さまましまさずとも、此館より外へは行まじ」

とありければ、金輪御前大に感ぜしさまにて、

「有がたき姫の志。さあらば伊与台の別業に預り、緑之助の帰りを待給へ。乳母もろとも不自由なきやうに計

はん」

とありければ、姫は大に力を得、

「兎角に宜、頼まいらする」

と、手を合せ給ふ。大炊之介かさねて、

「緑之助行衛知るまでは、叔父弾正、長岡の城を守りたまへ。又、伊予の国、宇和島の城は、当分土佐丸預り、宝

の詮義あるべし」

と言渡し、此旨奏聞せんと、勝成は都をさして登給ふ。

土佐丸謀叛 三毛猫の由来の話

抑、此土佐丸が先祖をいかなる人ぞと尋るに、西園

寺左大臣公宗卿の御弟俊季朝臣の御子にておはしける。

ことは元弘五年、北条相模入道の弟・四郎左近太夫、入

道高時没落の後、此公宗卿をたのみ、隠れ居たりける。

叛逆す、め、後醍醐天皇を紅葉の御遊と号て御幸なざし

め、殺害し奉らんといたされけるを、竹林院中納言公重

卿訴人によつて、早速結城判官親光、伯耆守長年、二

人討手としてさし向ふ。公宗卿は召捕れ給ひしが、舍弟

俊季卿、心はやき人なれば、後の山より忍び出、只

一人落延給ひ、終に伊予の国、立帽子の峯に立籠る赤橋

駿河太郎重時が方に身を寄、ともく叛逆を企給ひけ

る。此赤橋が妹金輪と聞へしは、容色他にこへ、心武々

しければ、俊季卿、いつしかわりなき中となり給ひ、一子をもふけ玉ふ。鰐の口より出し劍を此若君にまいらせければ、鰐五郎どのと申ける。その後、赤橋も謀叛あらわれ討死し、俊季卿も腹切んとし給ふ時、金輪姫、鰐五郎いまだ当才なりしを懐にいだき、『俊季卿諸とも迷途の道連とならばや』と、懐劍とり直すを、卿押留、

「我兄西園寺どの、太政大臣に経上り、位一品になり給ひ、既に天皇を亡し、一天の君にならんと志給ふに、時刻らず、無念に果給ひぬ。我、又、其志を継いで、此所にあり、再び叛逆をなすといへども、是又時至らず、むざむざ死することの残念さよ。御身、此鰐五郎を守り立、再び叛逆を企て、兄君、我無念を晴らしたび給へ。夫故、内侍所の御鏡は兄西園寺どのの密に奪ひとり、隠し置（挿画1-5）「上佐丸が素性」給ふを、我懐にして立退けり。是より後、御身を穢して、いかなる大名へも妾となり、此子を養育し、本意をとげ、修羅の亡愁を晴し給へ」と言終つて、腹十文字にかき切り、終に空しくなり給ふ。金輪姫、正体なく歎給ひしが、きつと心を取直し、

「かゝる一大事を女の我に託し給ふは、我を人と見定給ふなるべし。是より心を改、再び叛逆して天下をくつが



挿画 1-5

へさん」

と思ひ給ふ、心の程こそたくましけれ。

夫より伝手求め、式部少輔の妾となり、久方御前逝君の後は、准御台と称しうやまいかしづぎ、鰐五郎をも土佐丸と号、先伊与土佐兩國を手に入、夫より天下をくつがへさんとさま々、奸計をめぐらし給ひ、百世姫を深切に伊予の台にかくまる給ふも、実は人質の心なり。夫より、は、『叔父弾正を亡し、緑之助を尋出し殺害せば、土佐丸が家督は案の内』と、心中大に悦ばれけるが、人間無常迅速の習ひ、いつの程より煩ひ出し、次第にく頼みすくなくなり給ひける。

爰に年頃いつくしみ飼置れたる猫ありけるが、或夜夢ともなくうつともなく、此猫金輪御前の枕辺に來り言やう、「君の大神によりて我此年月栄花に暮しぬること、海山報ずるに物なし。しかるに君、此十三日には必死給ふべし。是、定業なり。歎くべきにあらず。然れども君は大なる望ましまして、天下をくつがへさんと計り給ふに、中途にして身まかり給ふは、嗚々本意なく思したまふらん。我、年頃の恩報じに、君が亡骸にのりうつり、再び謀叛すべし。しかる時は、土佐丸どのに我妖術を授づけ、縦令

百万騎にて寄るとも切ぬけ、終に天下の主となし申べし。御心安かれ」

と、いふかとおもへば、夢は覚けり。金輪御前、心に悦び、「三毛やある」

と呼びたまへば、傍に伏たり。金輪、猫に向て謝して曰、

「我大望、汝跡を統でなさは、何事かこれにしかん。今より我体を汝に譲るぞ」

と、いと嬉しげに毛を撫たまへば、不思議や、此猫三度叫んで何地へ行けん、所をしらず。夫より十三日の夜になりしかば、金輪御前の病段々平愈ありければ、御子土佐丸の悦大かたならず、本復し給ふに随ひ、御心たけなく、少しの怒りにふれては、婢などを手討にし給ひ、其死骸を寝所の下へ隠し給ふ。夫より後に、土佐丸を一間に請じ、呪文を授け、一七日の行をなさしめ給へば、土佐丸これを得て、飛行自在のまゝにして、雨を呼、雲を起し、或は足をも濡さず海を渡り、猛火の中へ飛入ども少しも焼けず、さま々の術をなして人のこゝろをまどわし給ふこそ異しけれ。

「犬猫／怪話」竹篋太郎卷之二

栗枝亭鬼卯述

金輪御前、蝶に戯れて本体をあらわす

并 蘭女を喰殺す話

『潜確類書』曰、「猫以薄荷為酒、虎以狗為酒」とはあれど、或人いわく「猫の酒は蝶ならん」と。是また宜成哉。

伊与の台には金輪御前、百世姫を預りいたわる事、他に百倍して、庭前には梅桜をうへ、夏は牡丹杜若、秋は千草の花を並べ、冬は雪見の亭杯、いと風流にしつらい、姫の心をなぐさめられける。折から暮春の頃にしもあれば、山桜は散り果、おそさくらの盛に、夏まぢ貌に牡丹のいまをさかりと見へければ、金輪御前も別業に入たまひて終日の宴ありけるが、蘭に「眉たれてよ」と鏡台に向ひ給ふ。後室の仰なれば背くことあたわず、剃刀もて後にまわり、此日、空うらゝかに糸遊陽炎所々に燃、おそ桜、牡

丹の香をしたひ数千の蝶飛かい戯るさま、鏡にうつりければ、後室、是をめかれせず詠おわせしが、いつとなくふら／＼と眠り給ひける。蘭は眉たれんと鏡の内なる後室の貌をみれば、不思議や年経る猫にぞありける。『こはおそろし』と手慄、おもわず後室の額へ剃刀にて疵付けければ、後室ねぶりさめて大に怒り、

「汝、妾にいかなる意趣ありて面に疵をつけたるや。但、百世姫の言つけにや」

と息まきて罵れば、姫は大におどろき、

「蘭が不調法、いかで自がいひつけ侍らん。幾重にもゆるしたび給へ」

と、手を合せて歎きわび給へば、橋立は猶更、

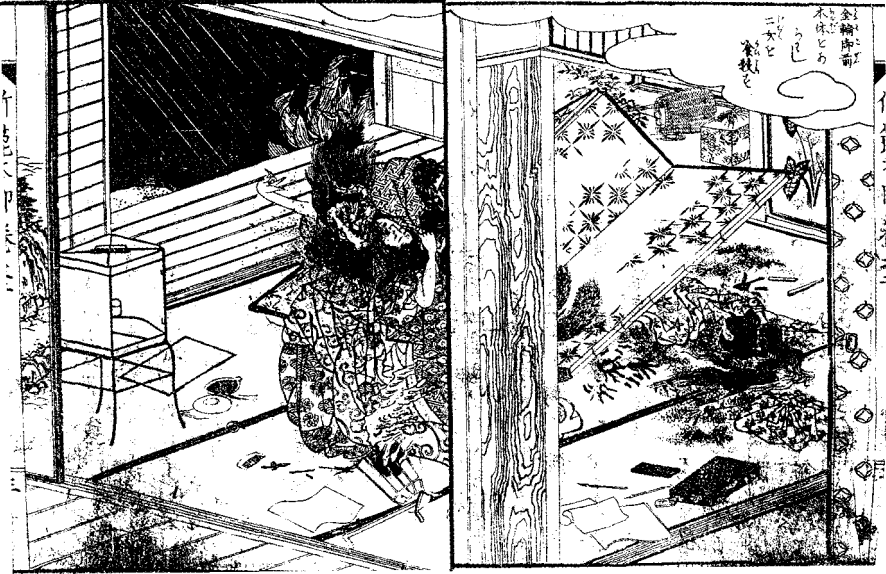
「娘の不調法ゆるしたまわゞ、此方にていかやうとも折檻をくわへ、御心のいるやうに計ひ奉らん」

と、蘭諸とも手をあわせていひ詫けれども、後室更に聞入給わず、

「百世姫のいひ付にあらずんば、蘭をわれに給われ」

と言捨、いとかる／＼と小脇にかいこみ、館に帰りたまへば、百世姫、橋立は気色の恐ろしさに供々館に（挿画②

①「金輪御前本体をあらわし、二女を喰殺す」きたり、さま／＼言



挿画 2-①

拵たまへど、姫に對面をさへし給わず、蘭を一間所へ押こめおき給ひける。蘭は「我誤りとはいひながら、かゝるあやしき姿を見しうへは、いかで我をいけおかん。所詮たすからぬ命」と覚悟をしながら、何卒此怪異を母へなりともしらせたく、指くひきり、我片袖に、

「のら猫の下はいありく真葛原

なつきかたきは人の心よ

あなおそろしの人の心よ

と書て、一間に直宿せる婢女を密にまねき、

「我なからんあとにて、この片袖を母橋立に届給われ」と頼みければ、此婢女、甲斐々しく受合、

「心易くおもひたまへ。人しれず届まいらせん」と、懐に納るうしろに金輪御前、すつくと立て、かの婢女をにらまへし其顔色、眼は百煉の鏡のごとく、髪は白銀の針かとうたがわれ、口は耳の根までさけて、枯木のごとき腕をいだし婢女を引提、

「おのれよくも蘭がたのみに随ひ、わが眼をぬきし憎さよ。いで汝が眼をも抜ひて腹いん

と、虎のごとき爪をもて眼をくり抜、先其眼をすゝり、腕を引ぬき、心地よげに喰ありさま、側に見みたる蘭が

心いかならん、計はかりするべからず。彼婢女かのこしもとを喰くら尽つくして、蘭らんが首筋つがみをかい擱いひて言いけるは、

「汝なんぢをかく手てごめにせんはいたわしけれど、先まきに我わが本体ほんたいを見られしうへは力ちからなし。必かならず々ずわれをうらむる事ことなかれ。又また、汝なんぢが大切たいせつにおもふ百世ひゃくせい姫ひめは、悴せがれ土佐丸とさまるふかく執心しやくしんすれば、つらくもてなすことにあらず。其上そのかみ、母橋はしだつ立付たつ添そへば、こゝろをおかず成な仏ぶつせよ」

と、引寄ひきよれば、蘭らんは両手りやうてをあわせ、

「逆さかも助たすからぬわが命いのちとは覚悟しやくごいたしながら、姫君ひめぎみの御先途ごせんどう、母の終りをも見て果はたたく候こう。縦令骸たとへかたは八ツ裂やっせつになるとも、御本体ごほんたいのことは申ままじ。今暫いましばらく、命いのちをたすけ給たまわれ」

とかきくどけど、聞まかぬ貌かほにて、

「汝なんぢがいふ事も理ことわりりなるべからん。なれど、もはや詮せんなきことなり。苦痛くるしみをさせんも不便ふびんなれば、只ただ一ひとおもひに成な仏ぶつせん」

といふより早く咽笛のどふえに喰くつきければ、蘭らんは「あ」と叫せうんであへなく息いきは絶たにけり。無慙むじんといふもあまりあり。夫それより悉ことごとくく喰くひ尽つくし、

「今日は思しわぬ食しよくに飽あたり」

と、手をもて化粧けしやうし、しづくと入いさま、おそろしなるともおろかにて、身みの毛け立たてぞ覚おぼへける。

与左衛門淵よざへもんふちの由来ゆいらい 鞍手十内怪異くらてじうないに逢話あふだ

こゝに伊いの国くに、立帽子たてえぼしが峰たかねの麓ふもとに与左衛門淵よざへもんふちとて大きな池いけあり。此池このいけを与左衛門淵よざへもんふちと号なづくことは、文治年ぶんじねん中に此村このむらに与左衛門よざへもんとて豪家ごうかあり。年々としとし早損かんぜんする土地ちなればとて、千金せんねんを出いだして山間やまあいに大きな池いけをほり、この水みづをもて養やしなふに水下みづもと五万石ごまんごくに及およぶ。これ誠に与左衛門よざへもんが功いさなり。其そのころ四国しよこくには弘法大師こうぼうだいしの所々ところどころに不思議ふしぎをなしたまひて、民たみのためによるしき事は弘法こうぼうの奇瑞きざいといひ習ならはしければ、与左衛門よざへもんいひけるは、

「かく千金せんねんを厭いとはず五万石ごまんごくの民たみをやしなふは我功わがいさなり。然しかるを、此儘このままにおきなば弘法大師こうぼうだいしの徳とくとならんは、いと口おし。けふより此淵このふちを与左衛門淵よざへもんふちと号なづくれ」

といひけるとなり。
然しかるに、いつの頃ころよりか、此淵このふちに主住ぬしすまて往来わらいをなやましかけるゆへ、里人さとびと大おほに恐おそれ、人供ひとみどりを備そなへんことを約やくして、承久じやうきうの末すえよりいまに至いたるまで年々としとし一ひとたび人供ひとみどりを備そなへて祭まつりりをなす。五月五日ごごなり。

爰に、土佐国土岐式部少輔の臣に鞍手十内とて忠臣無
 二の武士ありけるが、式部少輔、家の宝を三所に預けおか
 んとありけるを、「御家の乱、是よりおこらん」と、十内
 強て諫けるを、式部少輔大に怒かり、十内を遠ざけ、つ
 るに三所へ宝を分ちたまへば、十内、是より困遠して土岐
 の安否を探りけるに、浦辺彈正隱形の劍をあづかりしよ
 り謀叛の企、兄式部少輔をなきものにせんと謀るよし、
 「さればこそ」と伺ひより、虫干の折節、かの劍を奪ひ
 とり立退きけるに、追人あまた来るといへども、元來隱
 形の劍なれば此劍を帯する時は人の目にさへぎることな
 し。是によつて危きをのがれ、伊予の国の様子を伺ふに、
 金輪御前、土佐丸叛逆あるよし、「某おもふに違ざり
 (挿画2) ② 鞍手十内、与左衛門淵に怪異をみる」けり」と、其身は
 六十六部に身をやつし、大師の真筆をも奪ひ取らんと心を
 尽しけるに、はや式部少輔どの逝去あり、若殿緑之助どの
 は行衛しれず、忠臣第一の畑次郎左衛門横死と聞より、
 「こは一大事起りたり。されど此劍、謀叛人どもの手に
 あらざる上は心易し。再び緑之助どのにめぐり逢、三ツの
 宝を揃へ、土岐の家を引きさん」と、
 金鉄の志をはげまし、伊予の台に忍び入らんと来



挿画 2-②

りしが、彼与左衛門淵のあたりへ来かゝれば、俄に日の暮、ゆくさきを分たず。「こは不審」とあたりを見れば、辻堂あり。

「こはよきやどりなれ」

と独言して、笈打おろし、狐格子押開き、裏より戸を引立、まどろみけるぞ不敵なる。

初更の頃、里人あまた松明とぼし連、ひとつの箱を荷ひ、宮奴とおぼしきもの、かのはこをうやくしく壇上になほし、柏手うちならし祭事おわりければ、里人は足をはかりに逃まどひて帰りける。十内は辻堂より此さまを見て、「不思議の祭りをなすもの哉。箱のうちはいかなるものならん」

とうかがふに、夜も已に半なるころ、小雨さと降り、物すごき折から、淵の面俄に波逆立、あらわれ出るものを見れば、河童なり。眼は鏡のごとく冷じき姿にて立出、あたりを見まわし、かの備へし箱を開けば、十四、五の少女、口には猿轡を入れ、後手にいましめたり。時に、ある異形の怪物、池のほとりに集り宴の体なり。河童式礼して箱を台となし、かの少女を仰に伏しめ、庖丁する体、無慙いふ計なし。

此時、狸いひけるは、

「いまだ土岐の後室来り給わず。われくばかり参りても上客来り給わざる已前に賞翫もなるべからず。はやく使を立られよ」

といひもあへず、狐一匹はしりて何地へか行けん、ほどなく「首領来り給ふ」と、みなく頓首すれば、上段にむずと坐すものを見れば猫なり。綾の下着に錦のうちかけを着し、悠々とおしなほり、「例年の祭礼、馳走なり」といひけるに、各はつと平伏す。夫より大なる鉢に少女を庖丁してさし出せば、各うち寄、舌鼓してくらふありさまは、誠に地獄もかくやとおそろし。十内は格子のうちより眼もはなさず眺居ければ、一匹の獣鼻をいからし、「いかにや、人臭し。此あたりには人やあらん。尋見よ」と、隈々までも尋けるが、「辻堂に人こそあんなれ」と、扉おしひらきぬれど、十内は隠形の剣を帶しぬれば、かれらが眼にさへぎらず、只笈ばかりを見出し、「扱は背に六部のやどりしも、里人のはなしを聞て逃去、と、各もとの坐へ立戻り、さまく戯れ酒宴をなし、狸は腹鼓をうち、狐所作事をなし、鹿笛を吹て（挿画2）③一其

二〇首領をなくさめけるが、暫ありて猫吐息をつきていひけるは、

「我々かゝる遊をなして余念なしといへども、只心にかゝるは四国の竹篔太郎なり。汝等も生涯竹篔太郎に逢ことなかれ。われも竹篔太郎に出会ざるやうにせん。若、出会なば我術も消失ん。恐ろしの竹篔太郎や」

といひければ、満座各、こゑをそるへ、

「竹篔太郎に逢なよ、く」

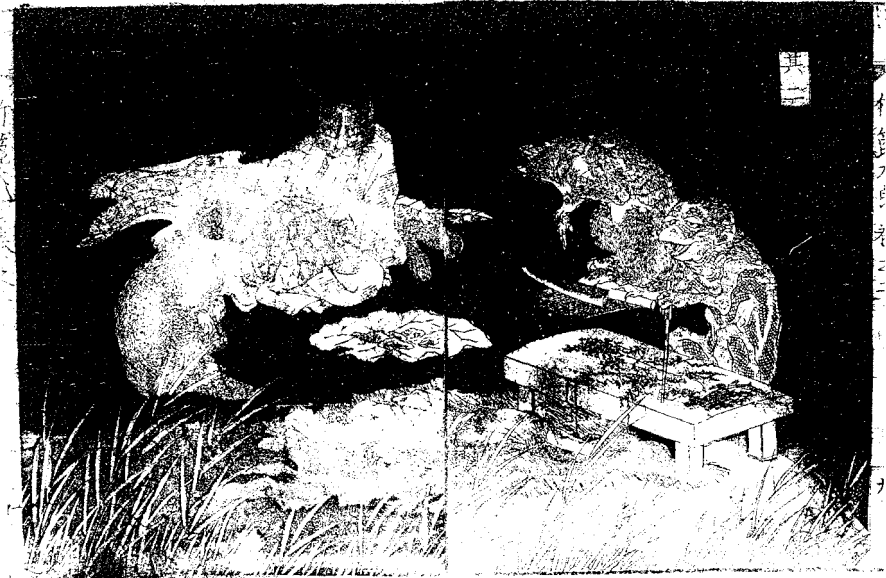
と諷ひのゝしりけるうちに、暁の鐘聞へければ、「又明年こそ参会すべけれ」といひて、おのがさまく消失けり。

十内は始終をうかゞひきゝしが、大に肝をけし、

「われ勇力おそらくは四国にならぶものあらじと慢じたりしが、いまの妖怪共の詞を聞くに、四国に竹篔太郎といふものありとや。雨をよび風をおこす術あるものどもの、かくおそるゝはいかなる勇者ならん。我、これにむつみて土岐家再興の一尉となさん。有難し、く」と、勇みて辻堂を立出、何国へ行けん、其所をしらず。

土佐丸、術をもて百世姫を謀る話

百世姫は蘭がおとづれを聞給ふに、金輪御前のいかりつ



挿画 2-③

よく終に後室の手にかゝりしと聞たまひて、御敷き大方ならず、いとけなきより兄弟同前(然)に育給ひしことなれば悲み給ふも断(理)なり。橋立は後室のふるまひを深くあやしみ、『娘が最後は是非なければ、かゝる行ひある後室の心、ながく姫君をあづけおくべきにあらず』とこゝろをいためける。

夫よりしては後室も面なくやありけん、別業(も)も来りたまわず、土佐丸は日毎に母の名代として姫君を訊ひけるが、姫のたをやかなる姿に心地まどひ、或は目をもて情を通じ、贈る物のうちに玉章をいれおきて心のたけを口説といへども、姫は縁之助のこのみおもひ給ひて、中々いらへをだにし給わず。土佐丸はいとゞあこがれ絶かたくやありけん、橋立をまねきいひけるは、

「百世姫、縁之助に心中をたつるといへども、彼は日陰もの。その上三ツの宝ひとつも手にあらず。所詮土岐の名跡おもひもよらず。我方には弘法の真筆、金花の短冊二色の宝あり。日あらずして隠形の剣を尋出し、家督にならんものは此土佐丸にあらずして誰かあらん。左あらば姫は両国の主たる簾中なり。我は両国の如きちいさき望にあらず。時至らば天下をもしるべし。左あらば姫を皇妃とな

さんは、また快からずや。汝、得とこゝろをきわめて姫を媒せば、恩賞は望に任せん。また、われ一大事を汝にもらしぬるうへは、返答によりて一討にせん。いかに、

といひければ、橋立、心に仰天すといへども色にも出さず、殊に金花の短冊此館にありとは心得ず、

「仰の趣き一々理の当然なり。しかる時には姫の出世、我身の大慶、この上やあるべき。姫いかやうに操を立つるとも、我身口説課せ、御本意を遂させ申べし。必、御心易かれ」とすかしければ、土佐丸うち悦、

「汝がごとく申うへは、偽もあるまじ。よく計らへ」といひ置て、館へ帰りぬ。橋立は姫君の前に出て、土佐丸がいひし事どもを伝へ、

「かくて此館にながくおわしなば、いかなるうき目にや逢たまふべき。今宵密に落延、ひとまづ都の方へ赴給へ。われ御供申べきなれども、一緒に出る時は忽たづね出され、ともいうき事のありなん。こよひ一人立退給はゞ、われはあとに残り、『姫君いたつきにわたらせ給ふ』と披露し、人を遠ざけて二日路も落延給ふころ、われも

跡より追付まいらせん。此一寸八分の観世音と申は御祖父

按察中納言資長公、清水寺に一日七日参籠あり、授りたま

ひし守本尊なり。御父の卿よりわらは預り奉れば、御身

をはなさず持たまふべし。土佐の湊にかならず待たまへ。

二日すぎなば追付まいらせ、ひとまず都へ御供せん」

としめしあわせ、夫より「姫君心地例ならず」と披露し、

寢殿ふかく置まいらせ、橋立は甲斐くしく、人知れず旅

の具をしらめ、姫君を夜に入、裏門よりおとしまいらせ、

左あらぬ(挿画2-④)「大悲の光明、土佐丸が術をくじく」体にてひ

とり残りありける乳母のこゝろ、おしはかりてあわれなる。

姫君はめしもならわぬ草鞋ひきしめ、杖に小笠とり持て、

何国をあてとなく立出たまへども、深窓に育給ふ御身の

いかで一人夜行したまわんや。恐しさいふばかりなく、そ

この松陰、かしの岩根に休らひ、やうくその夜を明か

し、都の方へといそぎ給ふ。

土佐丸は、かゝる事ともしらず、姫の別業へ来りければ、

「けふは姫君御心地あし」とて、橋立あまたの侍女、くす

りなど寝処へ持行さまなれば、執心せし姫なれば、ひとし

ほ心にかゝり、橋立にあふて、

「いかなる病体ぞ」



挿画 2-④

と、心ならず尋ねば、

「さまでの事にも侍らず。翌は御快候半」

と申捨て入り。土佐丸は、館の体いかにしても不審なりければ、呪文をとなへ考るに、先の夜、姫は館を出て都の方へ赴しとしりければ、大に驚き、

『扱は橋立にはかられし残念さよ。しかし、わが妖術をもつて姫を手に入る時こそ来りたり』

と、しらず貌に病気の容体を伺せける、ころのほどこそおそろしけれ。

姫はかくともしらず、其夜は岩が根枕にあくるを待給ひ、暁のころ都の方へいそぎ給ふに、やごとなき上廊の市女笠ふかく傾け、杖つき、草鞋しめ、はき給ふけしき、鄙人には目なれぬさまなれば、里の子の「あれよく」と付歩行にもいぶせく恥かわしく、『人の通わぬ道を行ばや』と、そこもあらぬかたへたどり給ふぞいたわしき。土佐の湊へは出もやらず、深き山路の方へ来り、

『こは、海あらんかたとおもひしに、山へ来りしはいかなる所ぞ』

と、其あたりにぞみ、

「この所は何といふ所ぞ」

と、人に尋ねば、

「是は伊予土佐の境、松尾坂峠といふ所なり」

と教て行過ぬ。姫はいとゞころ細くたどり給ふに、坂の半に道一筋ありて、何国へ行んと人待顔におはしける所に、三ツ輪くみたる老女の、手に櫛をもち、念珠つまぐり来るに逢給ひて、

「いかに老女、土佐の湊へはいづれの道へやゆくべき。おしへたび給へ」

と宣へば、老女、いと不審げに姫君をやうち詠めけるが、

「いたわしや、都人と見受まいらせしはひが目か。いかなる訳にて、一人かゝる山路にまよひ給ふぞ。土佐の湊はこなたの道也。妾に附て来りたまへ」

と、先に進みて歩行けるが、はや黄昏の頃とおぼしく、峠にかへる鳥姦しく、狼の声もの凄く聞ゆれば、姫いとゞおそろしく、いかなる所へゆくやらんと心ぼそくたどりたまふに、老女が竊と思はしう、住あれたれども奇麗なる庵へともなひ、

「都人、さぞや心うく思さん。参らすものこそ侍らずとも、こよひは爰に休み、翌なん土佐の湊へおくり参らせん」

と懇にいふにぞ、姫は誠に地獄にて御仏に逢ぬる心地

して、

「御情のほど忘れおかし。自、都にかへりなばあつく御礼申さん」

と、手をあわせたまへば、老女うちわらひ、

「君がむくひ受んとて御世話申にあらず。我は只、いたわしくおもひて伴ひかへりしなり。御身のすがたを見奉るに、凡人とはおもひ侍らず。御名をもつ、まず語り給はゞ、わらは、都までも具し参らせん」

と、懇にきこへければ、姫君うれしさがぎりなく、

「何をか包まん、我は土佐長岡の城主、土岐緑之助が妻百世といふものなり。かやうくのことにて館をのがれ、ひとまづ都にかへり、ふたゝび夫の行衛を尋んとおもふなり」

と、仰もはてぬに飛しさり、

「扱は左様にありけるかや。此老母は緑之助さまの乳母にて侍るが、今は年老、この所に引籠りしなり。左あらば君に見せ奉るものあり」

と、一間より伴ひ出るを見れば緑之助なり。

「こは夢にや。日頃恋しゆかしくおもひぬる心の届きたるにや」

と、取すがれば、緑之助もなつかしきはいかばかり、

「婚姻の夜より立別れ、世を忍ぶ我なれば、心にまかせず、恋しとのみおもひ暮せしに、尽ぬ縁とて不思議の所にて対面なしけることの嬉しさよ」

と、涙ながら宣へば、老女おほひによるこび、

「かゝるはにふの小家ながら、改めて御盃あそばされ、末かけて替らぬ御契こそあらまほしけれ」

と、かけ盃に銚子とり持、献々の盃とり納、「いざや、いねさせ給へ」と、夜具とり出せば、姫はうれしく緑之助がもとに寄添たまへば、不思議なるかな、姫の懐中より

光明赫々としてあたりを照しければ、「あな恐ろし」と緑之助はわななき伏。姫は「いか成ことにや。自を嫌ひ、かくは宣ふか」といだし付給へば、「ゆるしたまへ」と

飛退しをみれば、緑之助にはあらで土佐丸なり。

「あら口惜や。謀り課せしも、大悲の光明に照らされ、我本体をあらわすことの無念や。このたびは見のがすとも、

終には我本望を達せん」

といふよとおもへば、ありし老女も消うせ、土佐丸も見へず、庵と見へしも消々て、大なる櫛の下陰に忙然としておわしけり。

「こは浅間しや。こひしとおもふ心より、土佐丸が術にて身を穢さんとせしを、此御本尊の徳によりて退れしことの有がたきよ」

と、岩が根に御仏をすへ、礼拝し給ふぞありがたき。

かゝる所へおほきなる犬一匹、何国ともなく出来りて、姫の御袖をくわへて、「こなたへおわせ」といはぬ計に引行にぞ、姫はおそろじさいわんかたなく、ふり離し、杖をもて追払ひたまへども、立ち去らず。兎角して引ゆくにぞ、姫も〔挿画2〕⑤「土佐丸、立仙を試む」少し心を安んじ、

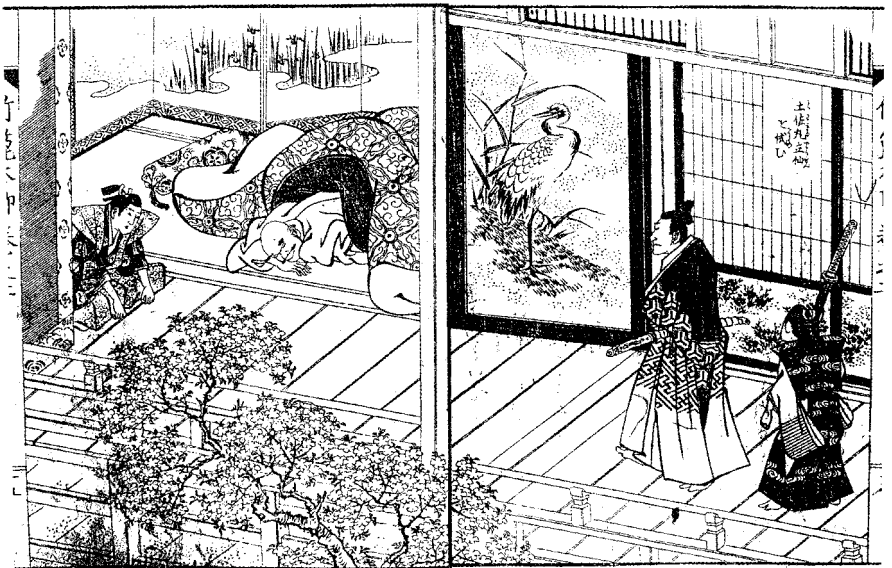
「此犬のさま、われを害するとも見へず。よしや、かれについで行て見ばや」

と、犬のゆくに随ひ歩行給ふ。

此犬、何国へ伴ひけん。後の章にあるべし。

三雲立仙、実意を顕わして内侍所の鏡を預る話

こゝに三雲立仙とて、庸医あり。仁術はいたつて下手なれども、悪計をなすことに妙を得たり。一とせ、式部少輔殿おほくの金子を給わり、大師の偽筆せしかど、土佐の国に写しをとめ給ふとのみ心得てぞ在ける。其后、金輪御前の計に随ひ、式部少輔殿の遺書を似せ、その外



挿画 2-⑤

土佐丸の悪事に組し、さまざまのことをなせしが、土佐丸、この立仙をひと器量あるものとおもひければ、いろく様に見るに、実に一肘とおもひければ、或時、立仙を一問によび入れ、人を払ひいひけるは、

「これまで汝がこゝろをためし見るに、二心あるものにあらず。われ、其方に無心あり。かなふべきや」

とありければ、立仙、完爾とうちわらひ、

「こは事新らしき御尋に候。君に一味仕候てより、一命はさし上候と存候へば、いかななることをも承べきに候」と、詞涼しくのべければ、土佐丸大に悦び、

「されば其命をもらひたし。其子細は土佐長岡にある叔父浦辺弾正、小量にして、ことをはかるに足らず、後の害にならん人とおもへば、早く殺害してかた付んとおもふなり。さるによつて、毒酒をもつて殺さんと、頃日三毒を調置たり。されど此毒をこゝろみずんば、功の有無しれがたし。他の者を書せんは安けれど、毒殺せしなど沙汰ありては、螻蟻の穴より塘を崩すがごとし。汝、これを試み、その上にて叔父を害せんは掌を反すより安し。いかに、此毒を飲むべきや」

立仙自若として、

「こは君の仰とおおぼえず。先達而差上しわが命、けふ迄助命あるは君のたまもの也。いと心易きことにこそ候」

とて、かの毒酒をとり寄、数盃かたぶけ、

「只今最期に候。跡のこと宜奉頼」

と、いひ終つてうち臥ぬ。土佐丸うちわらひ、「快し、く」と、一問へ入りける。

半日計ありて、立仙忙然と起上り、

「こはいかに。我、毒を飲でまさしく此所にて相果しが、扱は冥途黄泉にやありけん」

と、よろめきながら立上りしが、

「此空殿楼閣のさまは極楽世界ならん」

と独言して、そのあたりを見まわすに、伊予の館なれば、「いかにや、我はいまだ死ざるにや。偕は毒のいまだたらざるにや」

と、頭をふり足を撫てうたがふさま、土佐丸たち出て、

「立仙。汝が心底見届たり。其心をためし、頼みたき子細あるゆへ、七年の美酒を毒酒也、といつわり与しに、

少しもおおれず飲けるにて、実意あらはれたり」

と、さし寄て、声をひそめ、

「頼たきこと外ならず、我実父俊季卿、天下をくつがへ

さんと心を砕き、先年内侍所の御鏡を奪ひとり、此国へ来り、謀叛したまふに、一戦に利なく自尽し給ふ。われその存念を継いで天下を傾けんと志し、母に妖術を授り、火に入り、水に入るの術を得たり。されど、かなしきことは、此術を得てより、かの御鏡のあたりへ近付こと叶わず。さるによつて、この宝を守り奉る人なし。汝が心底、二心なしとはおもへども、世の中の飛鳥川、これぞと見定たることなくては此一糸あかしがたし、と謀をもうけ、汝をためせしは、此御鏡の守りをいたせんと為なり。しかれば、此城の良に社をたて、御鏡を神体となし、汝を宮守として守らしむべし。事成就せば、汝を大納言になし、三種の神宝を預べし」といひければ、立仙、大に悦び、

「鄙賤の某にかゝる大事をあかし給わること、面目このうへやあるべき。粉骨碎身してまもり奉らん」

と、いと快よく請合ぬれば、土佐丸おほひに悦、此御鏡を神体となし、社を建ける。伊与の三島はこれなりといふ説もありしぞ。

立仙かさねていひけるは、

「君、伊与土佐兩國をまづ取給わんに、三ツの宝（挿画 2

⑥「立仙、一幅の逸筆を見る」なくては叶ふまじ。漸く大師の真筆ばかり御館にありて、二品は御手にいらす。いかゞし給ふ」

と尋れば、土佐丸打うなづき、

「汝が不審、尤なり。先達て緑之助婚姻の夜、我宝蔵にしのびり、金花の短冊は奪ひとつたり。其時、次郎左衛門われを鎗にてさすといへども薄手なれば、終に次郎左衛門を手裡劍をもてうち殺し、立退たり。大師の真筆、金華の短冊ある上は、謀をもつて叔父彈正が所持の隠形の劍を手に入る、時は、三品の宝そろふなり」と

と勇ければ、立仙膝立なほし、

「いやく、かの隠形の太刀は、『虫干の砌、盜賊の爲にうばひとられし』と、彈正どのより御屈あれば、浦辺の館にはあるまじ」

土佐丸きつて、

「そのこといぶかし。叔父彈正兩國を呑む志あれば、盗とられしと披露して隠しおきし、と某はおもふなり。某、術をもつてこの詮義はいと安し。まづ二色の宝を見すべし」

と、金花の短冊、大師の真言を押開き、立仙に見せければ、



挿画 2-⑥

立仙大におどろき、

「此光明真言は全くの似せものにて、しかもわが筆なり」

と仰天すれば、土佐丸も初ておどろき、

「いかなることにて、汝似せ筆をなせしぞ」

立仙こたへて、

「先君、某をひそかに召され、『大師の真筆、写しなく

てはかなふまじ』と、其表具までも同じきれをもてさせ給

ふて、おほくの黄金を賜りしゆへ、まことに心をこめて写

し候ひき。按ずるに、縁之助殿の手に真の筆はあるべし。

しかし、まづ／＼これを真の筆なりと世間に沙汰したま

ふべし。謀をもつて、再び真の大師の筆跡をとりか

へさんは案のうちなり。御心をいたため給ふ事なかれ」

といさめけるに、土佐丸もやう／＼得心して、偽物を宝蔵

へ納ける。

竹籠太郎巻之二終

「犬猫／＼怪話」竹籠太郎巻之三

栗枝亭鬼卯述

伊賀寿坊伝 緑之助危難之話

『文選』曰、「虱処頭而黒、麝食柏而香」とかや。

人もそのころを置ところ、各その違あり。武将の子孫は武将の器をうけて天下を補佐し、盜賊の子孫は賊をなして子孫に其恥を遺す。

往昔、相馬小次郎將門に与して四国に簷を上し伊与の椽純友といひし者あり。其臣に伊賀寿太郎、伊賀寿次郎、雄名かくれなかりしも、終に海賊の悪名を遁れず、罪に伏し畢ぬ。

其後胤に伊賀寿坊円海とて、山海兩道の強盜ありける。

二男を伊賀寿藤太とよび、三男を真円坊弁海と申ける。此弁海いたつて美僧、能弁博識にして、大師八十八ヶ所、第三十九番慈參院といふ寺に住院して、人を教化すること、誠に今大師と称せらる。此寺に四国辺路(道路)の宿をなし、其外の旅人を施行に止宿させ、翌朝立出の砌は、海辺へ出る人には「何の湊出たまへ」と切手を渡し、山てを行人には「何郡へ出たまへば施行宿あり」と切手をわたしける。これみな伊賀寿坊が奸計にして、其道々へ人を出し、或は釣堯、或は汐汲などに身をやつし、其切手に路

用の有なしを符帳にしるし、黄金あるものはあらぬ山路の方へおしへやり、山中に於てこれを剥取、湊へいだしては賊船に乗せ、伊賀寿藤太これをはぎ取、うち殺して死骸を海中へうち込ける。是みな弁海が目利にして、多くの人を虎穴へおとし入る。無慙の悪僧なれども、形容は柔和にして、誠の地藏井とも見ゆる人柄なりける。

かゝるおそろしき所ともしり給わず、土岐緑之助は国を立退たまひてより、宝の有家を詮義せんとかなたこなたとさまよひ伺ひたまふに、伊予の土佐丸叛逆の企あるよしほの聞へければ、

『いざや、立こゑて様子を伺わん』

と、此処へ來り、慈雲院に夜辺より宿り給ひ、立出んとしたまふを、同宿ども、

「これより何方へ通り給ふや」

と尋ねれば、緑之助どの、

「われは宇和島のかたへ行者なり」

と宣へば、

「しからば此切手を持たまふべし。伊与の国は掟ぎびしく、一人旅は決して宿をゆるさず候。此切手をだに持たまへば、何方にても泊り自由に候」

と、わたしければ、

「こは辱なし」

とうち悦び、立出たまひける。

此夜、鞍手十内も此慈雲院にとまりぬれど、六部の間と客殿と程隔りぬれば、緑之助どのにも逢わず、若殿出立の跡にて寺僧どものいひけるは、

「今出行し若衆は、公家高家といふとも恥しからぬ容なり。いかなるゆへに、一人さまよひ歩行るゝや」

と、はなしを聞に、十内心にかゝり、

「其少人はいづれのかたへ参られしや」

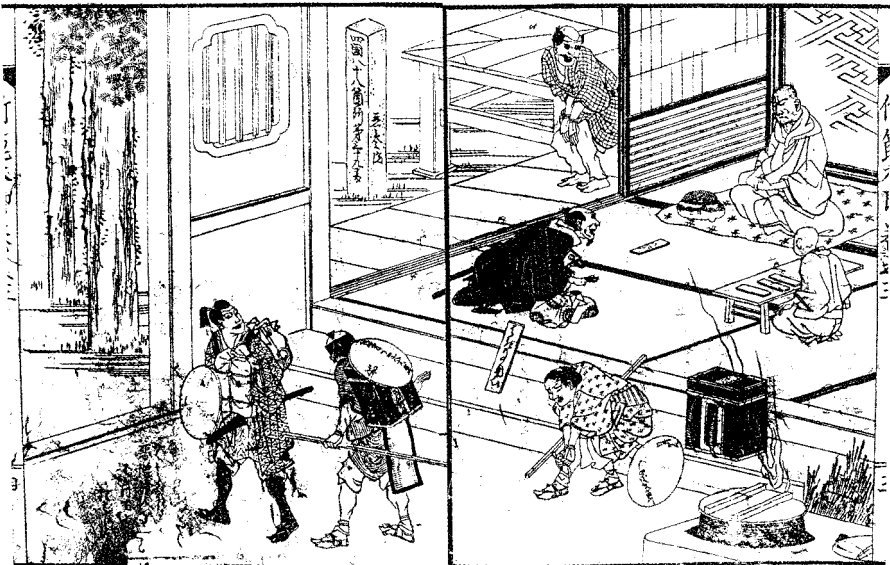
と、余所ながら尋ければ、

「伊与の宇和島へ行とて先剋出られし」

と答へければ、いよゝ心に『緑之助殿ならん』と思へど、さあらぬ貌にて、よべよりの札を述、鐘うちならし立出、

宇和島の方を志しける。

緑之助は馴ぬ旅路に足を痛め、笹山海道をあなたこなたときさまよひ給ひしが、松尾坂峠へかゝり給ふ。折からは日も西山に傾き、いと心細く、傍の松が根に腰うち懸おわしける所へ、柴刈男の来かゝり、(挿画3-1)「悪僧、旅人をはかつて虎穴におとしいる」緑之助をつくづくと見て、



挿画 3-1

「卒爾ながら、其御方様は何方へ通りたまふや。夕辺はいづかたに泊りたまふぞ」

緑之助こたへて、

「宇和島へ通るものにて、夕部は慈雲院といへる寺院に泊れり」

樵夫曰、「慈雲院といふ寺に泊れり」樵夫いわく、

「慈雲院に御泊りあらば、定て切手あるべし」

若君、

「なる程、切手をわたされし」

と、見せ給ふを、とくと見て、

「慈雲院の切手だにあらば、この道を左りへ一里計行たまへ。施行宿するところの候。もはやこの峠をうちこし給ふことは、其御方の足にては心もとなし。早々この施行宿へゆき給ふて、切手をいだし給へ」

と、懇におしゑて、通りすぎけり。緑之助は大に力を得、

『なにとぞ一足もはやく施行宿へゆきて宿からん』

と、道を左りへとり、急ぎたまふに、初のほどは大道なりしが、次第に道細く、樵夫通ふばかりの道なれば、あやしみたまひ、

「かゝる山中に施行すべき大家のあるべきやうなし。されど是より外に道はあらず」

と、猶山深く別入給へば、大きな谷川あり。丸木橋をわたしたり。これを渡りて、また半道計歩行たまへば、大きな家あり。『さては此内ならん』と立寄り、

「我は慈雲院より切手を持参りしものなり。あわれ一夜をあかさせたび給へ」

と音ない給へば、内より、

「暫くまち給へ。主に此よし申さん」

と、入りける。ほどなく、

「こなたへ入れ給へ」

と、門おし開き、内へ請じける。緑之助、其様子を伺ふに、首領とおぼしきもの、其形相、背のたかさ六尺ばかり。天窓はいが栗のごとく、虎の皮の毛衣を着し、四尺ばかりの大太刀を持せ、ゆるぎ出たるありさま、暴悪の相、面にあらわれ、髭左右へ別れけるが、緑之助にむかひて、

「汝、慈雲院よりの切手を出せ」

緑之助、懐中よりとり出して見せたまへば、開き見て、

「汝に路用はあらね共、いかさまよしある者と見ゆれば、

用ひ所あるべし、と書たり。汝が体を見るに、凡人にあらず。つゝ、まず出所を申べし」

と、左も押柄にいひける。緑之助は、生涯かゝる大言を聞給わねば、怒満面にあらわれしが、世をしのぶ身なれば、忍の一字を守り、両手をつぎ、

「我は上方者なるが、継母のさかしらにより伊与の国のしるべのかたへ落行者也。あわれみをたれ給へ」

とありければ、首領眉をひそめ、

「頃日、土佐長岡の城代、浦部弾正より、『土岐緑之助を国遠して行衛しれず。若、捕へ来らんものには黄金五十枚遣はさん』と、札を建られしと聞たり。汝が形容を見るに、まさしく緑之助なるべし。捕へて囑託をとらん」

と、星をさしたる詞に、『はつ』と思しけれども、陳じて此場を逃れんと、

「なかく左やうの貴人にあらず。下賤のもの也。ゆるしたまへ」

と、逃出んとするを、

「それ、のがすな」

と、手下の者ども追とりまく。『もはや絶体絶命の場なり』と、小太刀引抜、切払たまへば、各うかつにも寄付ず。

首領いかつて、八角の棒追とりなほし、しばし戦ひしが、何の苦もなく小太刀をうちおとし、「夫、縛れ」と声の下、終に縄をぞ掛にける。首領大に怒つて、

「汝、われを誰とかおもふ。この四国にかくれなき伊賀寿坊円海なり。黄口の輩、われに手向んとすることのしほらしや。汝、定て緑之助ならん。懐中には定て証拠のものあるべし。さがし見よ」

と下知によつて、手下の者、懐へ手をさし入、引出すは、大師の真筆なり。円海見るより、

「扱こそ、土岐の重宝たる大師の真筆を所持するは、間に及ばず緑之助なり。翌は手下の者にいひつけ、弾正へ引渡し、五十枚の囑託をとらん。その上、この真筆を弾正に売といわゞ千金には買べし。福德の三年目とは此ことならん。手下のものども、その囚人、大切にすべし。この真筆は上段の間に直し置べし。大切のものなり」

といひ渡し、寝所深く入けり。

かくて鞍手十内は、『若殿ならんか』と跡をしたひ、松尾坂峠まで来りしが、俄に肉動き胸騒(種画)「鞍手十内、主君の急難をすくふこしきりなれば、『只事ならず』と、猶足をはやむる所に、二筋の道あり。『いづれのかたへや行た



挿画 3-②

まふらん」とイけれど、尋問ふべき人とともなく、もはや日はいつしか西に没し、月の影ほのぐらければ、『いかげん』と思案をなし、突きたる杖を建て占方となし、呪をとなへければ左の方へ倒けるにぞ、『扱は此方へゆくならん』と、猶山深くいそぐに、道さへ絶てわきがたく、谷音とうくとして、更にわたるべきやうもなし。すかし見れば丸木橋のありけるにぞ、『扱は人の通ふ所なり』と、うちわたつて急に、大なる門あり。立寄て、

「物申さん」といひければ、手下の賊立出、

「何者なるぞ」と尋るに、

「我は夕べ慈雲院に泊りし六部なるが、もし此処へ十七、八の若衆は来られずや」と、聞より大に騒ぎ立、

「さては縁之助がゆかりのものなるべし。供に召連て褒美にあづかれ」と、門押開き、追取巻ば、十内おほひに驚き、

「こは何事なるぞ。我には何の罪ありてか、かくは手ごめにするぞ」

と尋ねれば、手下共、詞を揃へ、

「最前来りしは、土岐緑之助なる故にからめ捕たり。汝

も其ゆかりの者とおぼゆるゆへに、召捕て浦部弾正殿へさ

し出し、褒美にせんとおもふ也。尋常に繩かゝれ」

と呼われば、

「扱は今朝うわさありし若衆は、主人にてありけるよ」

と驚しが、

「さるにても、我この所へ来りしは、天運に叶ひしならん」

と、笈をおろし、かくせし大太刀ぬきはなし、無二無三に

切てかゝれば、詞にも似ぬ手下ども、四方へばつと逃退

けり。首領伊賀寿坊、八角の棒引提ゆるぎいで、

「何事なるぞ。騒々敷手下共」

と、表の方を見てあれば、一人の勇士、堅達婆王のあれ

たる勢にて、手下の者どもを切まくりければ、伊賀寿坊、

急度見て、

「こはしほらしき振廻。いで此世のいとま、とらし呉れん」

と、かの鉄棒追取て、打てかゝるに、十内、

「これこそ首領ならん。彼を討とり、若君を奪ひ返さん」

と、力足踏ならし、人ませもせず、五十余合戦たり。

伊賀寿坊、心におどろき、

『われ数年人とたゝかふて、かく迄骨をおりしことをおぼえず。きやつ、凡者にあらず』

と、また三十余合戦ふたり。十内は弥勢心加わり、終

に伊賀寿坊が鉄棒をうちおとし、寄よと見へしが、取て押

へ、高手小手にいましめける。伊賀寿坊、おほひにおどろ

き、

「われ、数年強盗の首領となつて、人を殺すこと数を知ら

ず。終にわれと十合を戦ものあらず。足下はいかなる人

にて、苦もなくわれをいましめたまふ恐しさよ。願わくは、

わが一命を助け、この所の首領となり給わゞ、われ、手下

と成て金銀を奪ひとり、歡樂に世を暮し給へ」

といひければ、十内からくと打笑ひ、

「己が心に引くらべ、盗賊をなして世をわたるものとお

もふか。『渴しても盗泉の水を飲ず』とは聖人の金言なら

ずや。我をたれとかおもふ。伊予土佐両国の太守、土岐家

の忠臣、鞍手十内といふものなり。近頃、山海に賊住て、

往來の旅人を悩すよし、汝等ならん。一々首をはねて

後來のいましめになさん。覚悟せよ」

と、刀ふりあぐれば、

「こは情なの武士よ」

と、じり／＼と後へよりけるを、
 「賊首に似合ぬ比興の振舞。いざ尋常に討るべし」
 と、庭の隅へ追詰けるに、縄付ながら数十丈の谷底へ飛込
 けり。

「こはたばかられし残念さよ」

と、夫より手下の賊を、一々切尽し、緑之助どののいましめ
 をときければ、緑之助のよろこび大方ならず。絶て久しき
 対面に、次郎左衛門が末期の事をも語りたまへば、十内も
 涙を押へ、

「もはや君にめぐり逢ぬるうへは、御心易かれ。宝を
 尋出し、再び御世に出し申さん」

と、床に飾りし大師の一軸をとり納、懐中し、
 「残念なるは首領をうちもらしぬる事よ」
 と、若君の御手をとり、伊予の国へと急ける。

土佐丸謀つて叔父大膳を害する話

不在話下、浦部弾正は、先年盗とられし隠形の劍、
 わが手にあらざれば、大望成就しがたしと、腹心の家（挿
 画3—③「其二」）来を盗賊に仕立、「宝劍の盗賊をとらへ、と
 り返せし」と、似せものをこしらへ、天聴に達しければ、



挿画 3—③

土佐丸このことを聞いて、

『隠形の剣を取かへせしとは覺束なし。実否を糺さん』

とすれど、大切の宝剑なれば、うかつに人に見せざれば詮義なく、月日を送ける。然るに皇都より勅使として右大弁早広下向の旨聞へければ、浦部彈正おほひにおどろき、『いかなることぞ』と相待けるに、程なく勅使参着したまへば、彈正出むかひ、勅使のおもむきを承りけるに、早広卿、簡とりなほしたまひ、

「此度、隠形の剣とりかへせしおもむき、叡聞に達し、いま二種の宝をも一緒にさしあげなば、伊予土佐の太守たるべき旨、綸言なり」

と宣へば、大膳承り、

「されば、宝剑は奪ひかへし候へども、二種の宝、いまだ在所をしらす。百日の日延、もはやほどなく候へば、いまだ日の御日延、天奏宜たのみ奉る」むね願ければ、早広卿かさねて、

「しからば隠形の剣、相改候上にて日延の願もよろしく伝奏すべき」

とありければ、彈正おほひに迷惑し、

『似せものを見せたらんには、もし隠形の剣を見しりて

あらば、いかにせん』

と、工夫をなしけれども、せんかたなければ、又願ひけるは、

「大切の剣にて候へば、何卒三種一緒に揃へて天覽に備へ申たし。まづそれまでは御用控下さるまじきや」

と願ければ、早広卿怒らせたまひ、

「汝、勅命を背き、剣を改むることをもこぼむは、全く似せものならん」

と、星をさして宣へば、彈正、心中に大におどろき、

『似せものゝこと露頭ありては一大事なり。まづ宝剑を見せ、もし似せ物といふならば勅使をうち殺し、謀叛の臍をかためん』

と心に納め、宝剑の箱を携へ出、

「もはや宝剑を御覽に入ずんば、違勅の罪のがれがたく候ゆへ、持参いたしたり。とくと御改下さるべし」

とさし出せば、勅使席をあらため、箱を開き、とくと見て、

「汝、われを小児のごとくおもふや。此劍は、抜はなす時は、其人の形を隠す。さるによつて隠形の剣といはずや。この劍は全く似せものなり」

と、投出したまへば、彈正、『一大事の所なり』と、

「其御劍は、体不浄なるときは形をかくすこと能わす。勅使御体不浄なるものならん」

と話かくれば、早広卿うちわらひ、

「我体の浄不浄は論ずべからず。我清浄なりといふとも、汝不浄なりといわゞ詮方なし。たしかなる証拠を見すべし。兩人のもの、御宝持参せよ」

と宣へば、緑之助御劍の箱を携へ、土佐丸大師の真筆、金花の短冊、両方より持出て、兩人こと葉をそろへ、

「叔父御、伊予土佐兩國を押領せんと企たまふにより、兩人こゝろをあわせ、先達而、隠形の劍は緑之助盗とり、金華の短冊、大師の真筆は土佐丸方に隠しおきしなり。最早、似もの、正体あらわれたれば、尋常に切腹あそばさるべし。勅使の御前に候間、未練の振舞したまふ事なかれ」と、兩人詰寄ければ、彈正大におどろき、

「扱は隠形の劍を奪ひとりしは緑之助にてありけるか。兩人の者に同士討させ、われ家國を押領せんものと工みしに、うらをかゝれし口惜きよ。黄口の孺子にはかられしも、我天命の尽る所なり。早広卿、わが切腹を見届、天聴に達せられよ」

と、押肌ぬぎ、短刀をつきたて引廻しければ、右大弁早広

卿、おほひにわらひ、

「我をたれとかおもふ。土佐丸なり。汝が小量をもつて兩國を押領せんこと、おもひもよらず。われ、これを殺

さんとおもへども、仮にも叔父の名あるにより、自滅せんと、かくははからいしぞ。おしむらくは、寔の劍をとり得ざることの残念さよ。いでく、吾術を見よや」

と、手をこまぬき呪文となゆれば、ありし緑之助、土佐丸、その外、勅使と家来までも消失して、土佐丸一人すつくと立てありければ、彈正おほひに仰天して、

「さては汝が魔術にはかられしか。いでいで、冥途の供に汝もめし連ん」

と、よろぼひよるを、首、宙(揮繰) ①「土佐丸はかつて、叔父彈正を害すに打落し、似せ物の箱を携へ、形は消て失にけり。

鞍手十内、畑次郎正勝に逢ふ。竹篋太郎が話

鞍手十内は緑之助を伴ひ、やうくにもとの道へ出けるが、また幾筋もある道にいたり、忙然として、『伊予の方へはいづれかよからん』と、おもひ煩らふところに、牛のごとき犬の、首に鈴をかけたるが来り、十内が裾をくわへてひく。十内、屹とこゝろつき、



挿画 3-④

『これは猟師の飼犬ならん。管仲が馬にあらねども、これを道しるべになさばや』

と、綱を手にからまき、此犬を案内者として、緑之助のもろとも、そこもしらぬ山坂を、犬にまかせて歩行ける。

かゝる所に猟夫とおぼしく、弓矢携へしますら男、そこよ爰よ、と物尋るさまにて、ゆくりなく十内に、はたとゆきあたりける。十内、声かけ、

「汝、眼ありながら白昼に我にゆきあたること、いかなる狼狽ものぞ」と

と呵りければ、かのもの、犬を見つけて、

「己、犬盗人。われは犬を見うしなひ、かくうろく」と尋るゆへ、汝を知らず。汝、何者なれば、わが犬を盗とりしぞ。真直に白状せよ」

と、息まきて匂りければ、十内も大に怒り、

「武士を盗賊になせしことの奇怪なれ。この犬は、わが裾をくわへて引故に、綱をもて此所へ来りたり。われを誰とかおもふ。四国に名高き竹篋太郎といふものぞ。雑言を吐かず、目に物見せん」

といひければ、此者、抱腹して大にわらひ、声をはなつて笑ひければ、十内いよく怒つて、

「四国に名たかき竹篔太郎といわざ、恐るべきに、汝、何連われを嘲りわらふ」

このものいよ／＼笑つて、

「四国に名高き竹篔太郎といふゆへにわらふなり。其故は、竹篔太郎といふは、いま汝が牽きたる犬なり。汝か、ことをしらずして、竹篔太郎は人なりとおもひて名をかたることのおかしさに、かくはわらへる也。其竹篔太郎こそ、わが家にも身にもかへがたき逸物ゆへ、きのふより尋ね歩行しに、汝が手にいること、おかしくも笑止なり」

と、始終を語りければ、十内はじめて竹篔太郎のまどひ開け、おほひによるこび、頓首していひけるは、

「われ、その竹篔太郎を尋る子細ありて、さま／＼心をつくすといへども、しれざる故、『わが名にして、もし咎る人もあらば、其来由を問わん』と、はかりしなり。足下は、そのぬしなるかや」

と、ちか／＼とよりて、かほ打詠め、

「其元は、畑次郎左衛門の子息、次郎正勝ならずや。前髪だちの頃、別れたれども、親父の次郎左衛門どのに生写しなり。われは鞍手十内なるを、見わすれられしか」

と声かくれば、かの男、とくと顔うち詠め、横手をうち、

「誠に十年余も貴顔を得ざるゆへ、見忘れたり。父次郎左衛門、われを勘当せしは十五才の年なり。先君式部少輔ど

の、妾腹のつれ子を土佐丸と名乗せられしことをあやしみ、我を伊与の国へ勘当せられしは、深き慮あつてのこと

にや、と何ふ所に、御家の騒動。父次郎左衛門も横死と承り、なにとぞ縁之助様の御行衛をたづねんと、こゝろを碎き申折から、足下に逢ひしは、いまだ武運の尽ざる所」

と、大に悦びければ、十内、次郎が忠臣(忠心)のいつわりなきをとくためし、松根に腰うち懸たまふを指ざし、

「其元勘当の砌は、御幼稚にましませば覚あるまじ。あれこそ土岐縁之助様にてわたらせたまふ」

と、引合せければ、畑次郎、仰天して、

「こは恐あることかな。我こそ次郎左衛門が粹、次郎正勝にて候。主従の縁つきせず、不思議の所にて拝顔仕り、歎び是に過す」

と、雀躍して悦びければ、若君も、次郎左衛門が末期の遺言迄も、つばらにかたり給ひ、御悦びはかぎりなし。次郎、心付て、

「まづ／＼、御両所とも我茅屋へ来りたまへ」

と、谷をよぢ、峰を越、麓の方へ来りければ、奇麗に住な

せし庵あり。次郎、先に立て、

「是こそ我栖に候」

と、入れば、女房たち出で、

「竹篋太郎が在所しれ候や。はやく帰らせたまふ」

といひければ、次郎はしかぐのこを語り、若君を上座に請じ奉り、十内をも饗応ければ、女房もおどろき敬ひ奉りぬ。(挿画③)「土岐緑之助、鞍手十内、竹篋太郎にみちびかれて次郎にあふ」次郎かさねて、

「若君に逢わせ奉る人あり」

と、一間へ入て、百世姫を伴ひ出ければ、緑之助おほひに驚き給ひ、

「百世姫にてありけるか。何處此所にはありけるぞ」

と、立寄給へば、姫は大におそれ、

「ゆるしたまへ、く」

と、もとの一間へ逃入給ひけり。緑之助どの、一円合点ゆかず、

「日頃われを恋しゆかしとおもひ暮し、土佐丸が方にて危難をまぬかれ、我跡を慕ひしゆへ、所々追手のかくりしと、風の便りに聞つるに、夫に引かへ、今我を見て逃込しは心得ず」



挿画 3-⑤

と不審たまへば、次郎夫婦も忙れ果、

「姫君此所にましますわけは、先月夕暮がた、この竹篋太郎、姫君の御袖をくわへ我家へ帰り候ゆへ、いかなる御方と尋候ひしに、土岐家の嫁君にてましますよし物語りたまふゆへ、我忠臣(へ忠心)の通じて、竹篋太郎が御供せしものならんと大に悦び、介抱申上しなり。日夜朝暮、若君の御事のみ案じ暮じたまひしに引かへ、逃込給ひし御心、いかなるゆへにや、其意をしらず。女房、一間へまゐり、御心を尋みよ」

といひて、一間に遣しける。女房御崎、一間にいつて姫君を見れば、衣引かづいて慄々としておはしけるに、

「いか成ことにて、日頃恋慕ひ給ひし若君を、かくおそれ給ふにや」

と尋ければ、姫君は松尾坂の危難をかたり、

「土佐丸が妖術にて緑之助さまの姿になり、我を欺きしに、守本尊の観世音、光明を照らし給ふゆへ、近寄こと叶わず、逃去りしが、又其人よ、と恐しく、胸の騒ぎ納らず」

と、猶もおそれ給へば、御崎、其事を聞て打笑ひ、人々に語りければ、若君も疑念晴させ給ひ、一間に入て、姫に向

ひ、

「汝、恐るゝことなかれ。我社寔の緑之助なり」

と、さまざま危難にあひ給ひしことをも語りたまへば、姫ははじめて心を安じ、年月のこひしきゆかしさをのべ、金輪御前の振舞、蘭が横死までもかたりたまへば、緑之助どのも奇異のおもひをなしたまふ。

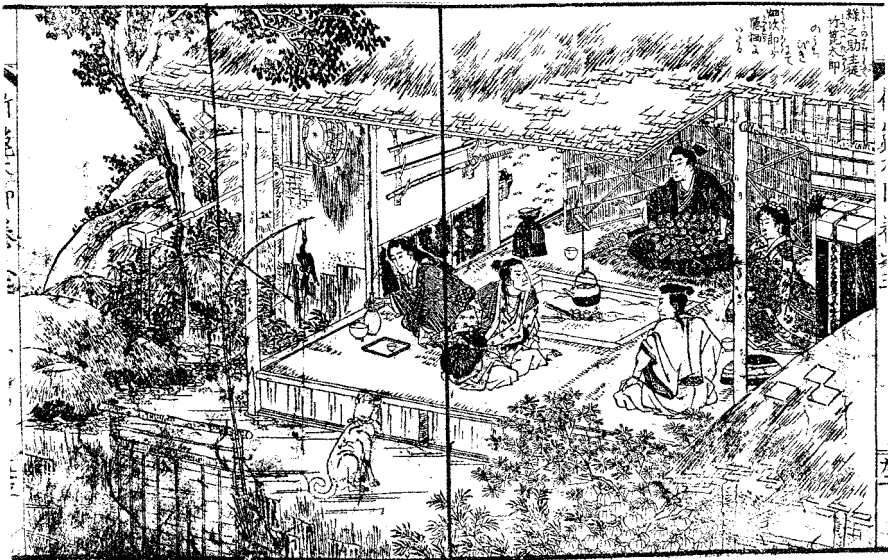
十内は次郎にむかひ、

「某、与左衛門淵の怪異を〔見〕て竹篋太郎がことをはじめて聞。それより心をつくし尋ねしに、足下の飼給ふ犬なりとは、誠におもひよらざることなり。扱、此犬の来由を委しく語りたまへ」

といひければ、次郎答へて、

「いかにも此竹篋太郎に付ては、あやしき物語の候。

某、もとより父の勘当うけるより、此山家に住みて獵人を業となし、昼夜山壑にあそびけるに、いつぞや黄昏よりたちいで、松尾坂のかたへまかりし処に、後より二十四、五の女の、いとおとろへたるが付来たる。我、山野を家となし、おそろしきといふことを終にしらざりに、心身慄々として動くこと(挿画3)⑥「緑之助主従、竹篋太郎のみちびぎにて、畑次郎が隠所にいたる」あたわず。其時、女、『畑



挿画 3-⑥

次郎殿、く〜と呼び留候故、いよく不審はれず、『なにごとにや』と立留れば、『われは、都、按察中納言家に召仕われし、蘭といへる女なり。姫君百世の方、土岐縁之助どのに婚姻ありて付添来りしに、土岐家の騒動に付て、伊予の国に姫もるともありけるに、土岐家の後室金輪御前といへるは猫股にて、我その本体を見あらわしぬるゆへ、終に我を喰殺しぬ。そのうらみを晴さんとおもへども、力足らず。わが子、竹篋太郎といふもの、四国の山奥にあり。明日、君が家におくらん間、なにとぞ彼に力をそへ、我敵を討給われ』と、いふかとおもへばそのまゝ、消失たり。われ、其志を不便におもひ、其子の竹篋太郎来らば、いひあわせて彼が亡愁を晴させんと待し所に、其翌日、この犬きたりて庭に伏す。我、よも竹篋太郎は人ならんとおもひしゆへ、この犬いかなる故にわが庭にあることをしらず。その日一日までも一人も来らず。余り不思議におもひて、『若、此犬のことにもや』と、『竹篋太郎』と呼ば、我こと心得、尾をふることに人間の『われなり』といふが如し。『扱は竹篋太郎は犬なるらん』としるといへども、犬を蘭女が子といふことしらざりに、頃日、此犬、姫君を伴ひかへり、様子を聞に、蘭女が犬の子を産しわけを語

り給ふによて、其まどひ解たり」

とかたるにぞ、十内も、与左衛門淵の化物どもがいひけること共をかたり、はじめて悟り、横手をうち、

「土佐丸が妖術も猫の所為なること明けし。しからば、不日に宇和島の館へ竹篋太郎を連行、彼猫を退治し、金花の短冊を奪ひかへし、土佐丸を亡さん事、手裏にあり」

と、十内、次郎、大によろこびければ、緑之助どもの立出給ひ、喜悅斜ならず、

「死したる蘭が忠義によつて、竹篋太郎を得ること、誠に百万の士卒を得るにまされり。しかし、妖術をおこなふ土佐丸、竹篋太郎が来るとしらば、陰をかくして逃去るべし。なにとぞ、謀をめぐらし候へ」

と、割筭を懐より取出し、

「次郎左衛門に手裏剣を打し曲者、後の証拠ともならんかと、我これを所持せり。金花の短冊、土佐丸が方にありと百世姫が噂を聞ば、次郎左衛門を討しは、全く土佐丸なるべし」

と、筭を次郎に渡したまへば、次郎押戴き、

「仰、御尤に候。父が敵も土佐丸ならんと推量いたすといへども、猫の通方にて此方の手楯を見すかされては詮

なし。いかゞせん」

と、十内もろともおほひに心を痛めける。

絵本竹篋太郎卷之三 終

「犬猫／怪話」竹篋太郎卷之四

栗枝亭鬼卯述

伊賀寿坊兄弟、土佐丸が味方となる話

『莊子』曰、「若、人作不善得顯名者、人不害天必誅之」と。

まことなる哉、伊賀寿坊円海は、『天下の英雄われより外にあらじ』と慢じけるに、鞍手十内が怪力に敵しがたく、数十丈の谷底へみづから飛込、危きをのがれ、それより弟・真円坊弁海がもとに來り、

「その方が指図なせし若衆、まさしく土岐緑之助ならんといましめ置、大師の真筆も懷中にありしをうばひとり、十分仕をせたりとおもひしに、一人の豪傑來りてわれと戦ふこと八十余合、ついに其敵しがたきをしつて、次

第くんに尻込し、谷底にのがれて辛じて命を助たりたり。土岐家の叔父浦辺弾正、叛逆の企ありしゆへ、一味して天下を謀らんとおもひしに、土佐丸にはかられ切腹して死したるよし、ほの聞たり。わが隠れ家を見あらわされぬれば、此後ふたゝび帰んことなりがたし」といひければ、弁海しばらく沈吟して在けるが、「兄の仰のごとく、此寺より割符を遣し不残虎穴に落入らせぬれども、悉く命を断ぬるゆへ、いま迄しる人なし。其英雄、手下の賊をいましめ白状させなば、此寺に住することもはや叶がたし。所詮、宇和島の土佐丸にしたがひ、謀叛せんより外なし。さりながら、若輩の土佐丸、大將の器なるや様さずんばあるべからず。兄と兩人、宇和島にいたり、土佐丸に対面して、智はわれ試み、勇は兄様しみたまへ。もし愚将ならば打殺して宇和島を乗とり、根城となさんは何程のことあらん」といひければ、円海大に悦び、「汝が申処、金玉の謀なり。いざや、兩人、宇和島にいたり、土佐丸をためさんと、用意してたち出ける。」かくて彼地にいたり、かくと案内しければ、土佐丸に通

ず。土佐丸、その人柄を問ふに、

「一人は至ての美僧、一人は六尺余の大坊主なり。ぜひ太守に面会せんと申候」

といひければ、土佐丸、大に不審し、直に呪文をとなへ考るに、

「われに味方せんと来りしものなり。しかれども一通りの輩にあらず。奇妙の謀をなして、味方になさば片腕となるべき者どもならん」

と、さあらぬ貌によび入れける。円海、弁海は「しすましたり」と、程なく太守出たまふと、各尊踞《尊踞》し、たちいづるを見れば、面貌暴悪にして、眼中するどく、総髪の童形ながら、背の高さ五尺八寸計、衣服の花美、目をおどろかし、金作りの太刀を小姓に持せ、もうけの褥に座しけるありさま、威あつて猛く、いかさま大將の器量そなわりてぞ見へける。土佐丸、先、詞をかけ、

「汝等、両僧、われに味方せんと来るや。またこの城をうばわんと来るや」

円海、弁海おほひに胆を化《消》し、

「いかさま、おそろしき眼力。この時憶《憶》してはあしかりなん」

と、弁海自若として、

「我々、君に味方せんともあらず。また当城を取るとにもあらず。味方すべき時ならば味方し、城をとるべき時いたらばとるべし。時をしるを智と申なり」

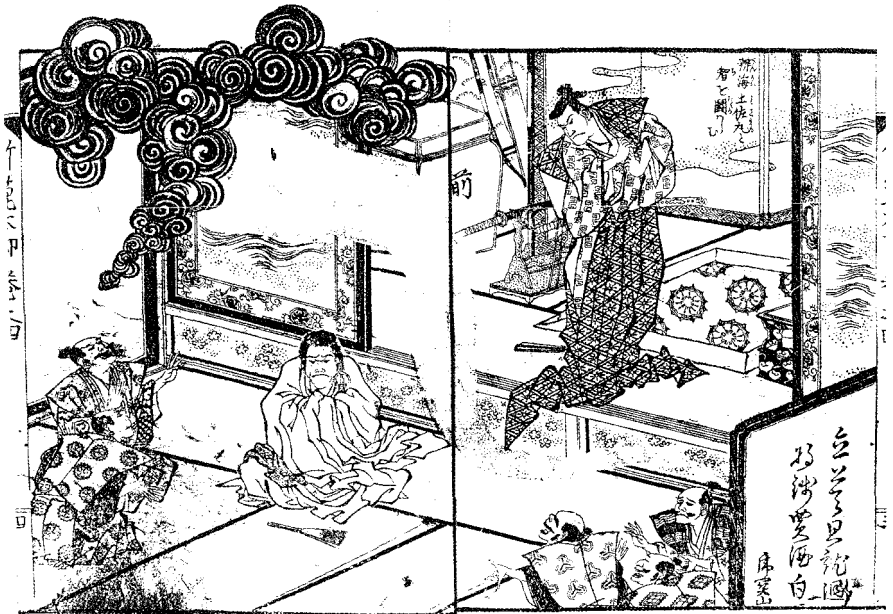
土佐丸からくとうち笑ひ、

「汝、いかほど時務をしるといふとも、我城を取んこと、鼠の力をもて虎の髭をねらふにひとし。心を傾けてわれに味方せば、時いたりなば大國の主にも（挿画4-1）一弁海、土佐丸と智を闘はしむ（挿画4-2）なるべし。はやく心を決して返答せよ」

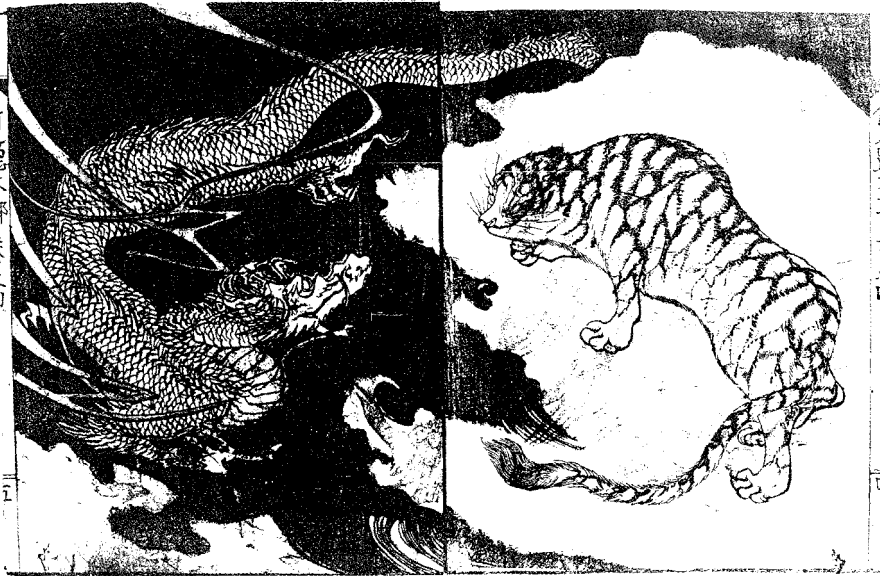
とありければ、弁海またいわく、

「君、玄々妙々の術ありと承る。われく、そのかみ、守敏僧都が伝を得て術をなすこと、殆、玄妙を得たり。君、我術に勝たまわ、誓つて兄弟、味方となり申さん。先試にわが術を御覽ぜよ」

と、袖の内にて呪文唱れば、屏風に画きし虎、忽然とぬけいで、土佐丸を目がけて牙をならし、爪をときかけ向へば、土佐丸も口のうちに呪をととなへけるに、こなたの屏風の竜あらわれいで、虎をくらひ伏せんとする勢、流石傍若無人の円海も身の毛たつておそれける。竜虎相



挿画 4-1



挿画 - 4 - ②

争ふこと、や、半時ばかり、竜ついに虎をくひ伏ければ、
各、元の絵にもどりける。弁海おほひにおどろき、

「君が術、なか／＼わが及ぶ所にあらず。しかし、我、幼
少より兵書を好てよむこと数千巻。これを君にはあきら
めたまふや」

土佐丸、頓首して、

「我、幼少より大志をいだきて軍学に心をよするといへど
も、いまだ其奥義を悟らず。貴僧、真に其奥儀を得たま
わゞ、師として学はん」

と、七書三略を論ずること一時ばかりにして、弁海が雄弁、
四筵をおどろかしぬれば、土佐丸おほひに悦、「わが為
の張子房を得たり」といひければ、円海すゝみ出て、

「君、剣をまなびたまふや。我、ひとゝなり、力飽までつ
よく、ことに雑刀を得たり。ねがわくは君と一勝負して、
その上にて君臣の礼をなさん」

土佐丸、これを悦び、

「汝が一言、勇氣ありて面白し。我も剣をまなぶこと、
年あり。いざや、汝と勝負を遂ん」

と、木太刀、長刀をとりよせ、身軽に出立、たちむかへ
ば、円海も『一世のはれなり』と、衣の上に玉櫛をか

け、長刀柄長くもちしありさま、いかさま西塔の武蔵がいにしへもおもひ出られていきまし。土佐丸も小太刀上段にかまへ、虚実を窺へば、円海いらつて打長刀、土佐丸はつしとうげ、たがひに秘術を尽しけるが、劍術手練の土佐丸に妖術兼備したれば、円海とかく眼くらみ、動すれば受太刀になりけれども、我慢の悪僧なれば、踏込く戦ひける。されど土佐丸が剣法いよくつり、終に円海をうち伏ければ、円海も屈伏して、兩人ついに主従とぞなりける。土佐丸がいわく、

「我叔父彈正を切腹させ、土佐の国長岡の城、空城となれり。我一肘となるべき者を撰びて城代となさんとおもへども、然るべき良等なきことを憂しに、いま汝を得しこと、劉備が臥竜を得し心なれば、兩人、土佐に赴き、城代すべき」旨ありければ、兩僧、大によるこび、「未頼母しき大将を得しことよ」と、うち連れ、土佐の城へ赴きける。

按察中納言、安倍保清、伊予に赴く
伊賀寿藤太が話

さんぬ
去ル元弘の頃、禁裡に内侍所の御鏡失せたりといへど

も、一日も三ツの御宝なくてはかなわざるゆへ、密に代りの御鏡をもて内侍所の御鏡と号けて納めたまふといへども、帝、御心安からず、『何とぞ在家を詮義せばや』と、さまざま宸襟を痛めたまひ、安倍保清をもて占わせ給ふに、保清、謹で考へ、奏しけるは、

「いま此御宝、都をはなれて四国の地にあり。忠臣の人をつかわし給わざ、御宝再び帰洛あるべし」と奏しければ、帝、歡感ありて、「按察中納言は四国に由縁ある人なれば、立越、密に詮義あるべし」との勅によつて、歌枕と披露し、下らんとし給ひしが、再び奏して、安倍保清をも具して御宝のあらん国をも考へ、また、ともく力にもなさんことを願たまふによつて、帝、これをゆるしたまひ、「保清をも具して下るべし」との勅によつて、兩脚旅装ひをなして、供人少々めしつれたまひ、浪華の浦より船に召れ、四国の地に赴き給ふ。順風に真帆引はへて、讃岐の国、丸龜の沖まで来り給ふ。

愛に伊賀寿坊円海が弟に、伊賀寿藤太といふものあり。四国第一の海賊にて、手下あまたありけるが、常に海辺を往来して旅人の貨をうばひとりけるに、中納言の船、丸龜の沖にかゝりけるを、手下の海賊ども注進しけるは、

「都方の船と見へ、丸亀の沖にかゝりけり。いざや、往て宝をうばひ取らん」

と訴ければ、藤太よろこび、己が船を中納言殿の船の傍に碇をおろし、さあらぬ体にもたりける。

安部保清は日々筮をとりて吉凶を卜しけるに、其日の卦面甚凶なりければ、中納言に申て、

「今日此所において甚凶事あらん。はやく船を丸亀の湊に付べし」

と、船長にいひければ、中納言殿も心付て、

「保清の神卜疑ふべからず。早く湊に付べし」と宣へども、船頭自若として、

「こよひ初更の頃は、風出て、丸亀へ早くまいり候はん。夫まで何程のことあらん。しばらく待給へ」

と、更に受引ざりければ、詮方なく其所におわしける。

其日、風うらゝかに、波たへて、海の面、真砂地のごとくにありければ、藤太が船より屈竟の若者、二、三人、海中へ飛いり、色々鱗をとりけるさま、都には目なれ給わず、いと興に入りて、舳先に立出、保清もるとも詠め給ふうち、一人の若者、大きな鯛を中納言殿の船へ投入、

「これ庖丁し給へ」といひ捨て、又々海中に沈ける。中

納言殿も保清も、「こは興あること哉」と、其儘船人にいひつけ給ひ、庖丁なきしめ、酒波かわし給ひける。是、藤

太が謀にて、此若者どもにいひ付、中納言どの、船の底に錐をもて穴を明ければ、次第に水の入やうに

拵けるぞ恐しき。

此内にも安倍保清は、「必、凶事あらん」と、心をゆるさず、酒もしかぐ飲まで、哨船のあり所など見置て、

「若、変事あらば、かくせん」など心にこめていたりける。

早、日もくれ、灯火てらすころあり、何とやらん船中騒しく、「船に垢こそ入たり」といふ中に、次第に水

おほくなりければ、保清、「すは、今日の凶事、これならん」と、身拵して、中納言どのにひきそひ、心をくぼる所へ、

隣の船より屈竟のものども、手々に氷のごとき剣を抜き、おど入り、水主、船頭、その外の家来をも切倒し、な

を奥ふかく切込ありさま、保清、「さればこそ」と、中納言の御手を引、やうやく船を伝ひおり、哨船におり立、或

人息をつめて様子を聞いたるに、海賊ども声々に、「昼、見おひたる両人の大将こそ見へね。よく船底までもさがしてよ」と、呼わりければ、「今は詮方なし」と、纜押切、保清甲斐なくしく中納言を伴ひ、壘をおしてはるかに逃れ

去ければ、海賊ども尋かねて、財宝を悉くうばひとり、家来のものをも切戻しけるうち、船はぜんくくに水入りて、終に海（挿画4-③）「海賊等、中納言の御船に押寄せ」中へ沈みけり。藤太は「『すましたり』と、財宝をわが船へ運ばせ、何国ともなく漕行けり。

按察中納言、再び危難 保清卜筮の話

安倍保清は中納言公善卿を哨船にとりのせ、何国をあてとはなけれども、力にまかせて艫をおしけれども、元より仕馴ぬ業なれば、いまは力つかれ、腕なまり、詮方なく船中に倒ければ、船は風にしたがひ何国ともなく漂ひゆきける。公善卿は船心にて頭をさへ上給わず、『いまや覆がへらん。いまや魚腹に葬られん』と、おそれ慄（慄）ぎ給ひけるが、

『南無や金毘羅大権現、擁護をたれ給ひ、我々を救ひ、内侍所をふたゝび都にうつさせたび給へ』

と、心中に祈念し給ひければ、不思議や、風俄にかわり、一さんに伊与の国なる宇和の湊に着けり。公善卿も保清も蘇生たる心地して、汀にあり、里人を近付け、所を尋給へば、「爰は伊与の国、宇和島といふ所なり」と聞



挿画 4-③

へければ、『扱は婿縁之助が領内ならん。あらうれしや』と、かたへの家にたちよらせ給ひ、国の様子をたづね給へば、式部少輔どの逝去の後、両国の騒動おほかたならず、縁之助どのも行衛しれず、叔父彈正、両国を呑んとしたまひしに、土佐丸が謀にて詰腹きらせ、今は両国とも土岐土佐丸押領して、近国も切取んと企るよし、百姓は苛政にくるしむことまで委しく語りければ、公善卿おほひにおどろき給ひ、頼に思ひし縁之助、姫の行衛だにしなければ、忙然としておわしける。保清も国の騒動を聞てあきれ果てありけるが、卜筮を立て考るに、「北東にあつて瑞氣あり。これによつて吉を得ん」とあらわれければ、中納言どのをともし、何国当所はあらねども、北と東のかたへ立越ける。

宇和島の城を見上げて、保清大に驚き、

「この城中、妖氣満々たり。まつたく魔鬼のすみけるならん。あら恐ろし」

といひて、城下を立去りけるが、中納言殿は、此程より心づかひに心身悩乱して一足もうごきたまふこと叶わず、

「こは口惜。おもき勅命を蒙りて此所に死せんことこの残念さよ」

とのたまへども、詮方なし。保清も仰天していろく介抱なしけれども、詮すべきかたもなし。「此あたりに業師やなき」と、里人に尋る折ふし、一人の医師来かゝり、此体を見て立留り、

「足下達は当所にみなれぬ旁なり。何国の人々なりや。わけて一人は大人になやみ給ふ様子なり。我、仁術を施す身なれば、見捨にはなりがたし。まづくわが家へ来り給へ。茅屋も程近し」

と、懇にいひて、公善卿を肩に打かけ、わが家へともなひ、さまざま介抱しけるに、中納言どの、漸心涼しく見へたまへば、保清も力を得、主人の厚志を謝し、一兩日も此医のかたに養われありけるが、公善卿のやまふ、中々きうに康復やうすもあらず。

「兎角心にかゝるは東北の吉瑞なり。足下、何とぞ此ことをはかりたまへ。左ある時には、我、しばらく此所にありて保養をなし、よき便をき、なば早速たづね行へし。主の厚志、なかく見捨る人にあらず」

とかたりたまへば、保清も、中納言殿一人のこしおかんも心ならねども、また公善卿のおほせももだしがたく、主の医にこのことをかたりければ、主こゝろよく受引、

「かならず病人は氣遣ひ給ふな。われの及ほど療用を加へ、足下の便りあらんかたへおくりまいらすべし」

と、懇にいひければ、保清もいまは心を安じ、東北をさして出行ける。

主の医、かいぐしく介抱しければ、中納言も余程快気のやうすに見へければ、医師、中納言にいひけるやう、「かく御世話申も他生の縁なり。御身のうへをつゝまず語りたまわゞ、ともぐ御方ともなり申さん」

といひければ、世に便なき公善卿なれば、此程の深切に心をゆるし、

「我は按察中納言公善といふものなり。かようくの内勅にて（挿絵4）④「保清、吉瑞を推す」この国に來りしに、婿緑之助がゆくゑもしれず、娘はいづくに在やらん、心もとなく尋さまよふうち、かゝるやまひにより主の世話になりぬる」よし、つばらにかたりたまふに、此医、心にうなづき、

「御心安かれ。われ、君の一肘となりて御両所の御行衛をたづね、逢せまいらせん」

と、快うけ引ける。何ぞはからん、此医は三雲立仙なりければ、中納言どのを得ておほひによるこび、早速土佐



挿画 4—④

丸が城中にいりて、

「某、此間、都ものと見うけ、病になやみ候ゆへ、わがかたへ引とり、養生させ、いつわつて深切を見せ、尋候所、中納言公善にて、内侍所詮義のため四国へわたり候よし。能鳥を獲候ゆへ、御注進申上る」

と、いさみ進んでのべければ、土佐丸も大によろこび、

「汝が忠臣《忠心》、感ずるにあまりあり。猶もいつわり汝が方に留置べし。その者を人質となしおかば、縁之助、われを亡さんとするとも、舅を楯に擲おひて出さん、いかで鋒先のくぢげざらん。また、百世姫を尋出し、口説かんにも、父を殺害するとおどしなば、我に随わんこと案の内なり。いづれ大切の人質なれば、随分心を尽して饗応べし」

といひわたし、立仙をかへしける。

安倍保清、畑次郎に逢ふ話

安倍保清は、中納言公善卿にわかれて、何国を当とはなけれども東北の方をこゝろざし、足にまかせてあゆみけるに、前にひとつの大山あり。是をもなを東北のやまへ道もなき方をかまわず歩行ける。峰をこへ谷をわたり急がれ

しに、何国ともなく猿數十匹出来たりて、保清をとりまきぬるにぞ、保清おほひに驚き、いかゞせんといば、猿も同じく立どまり、歩行ばあゆみ、急で行ばまたいそぎけるゆへ、保清せんかたなく礫をうちて追散さんとすれば、数十の猿、手々に礫をうちけるゆへ、雨のごとく、礫あたりて進むことあたわず。『こは浅間し』と、松が根を枕として伏ければ、猿もことごとくふしけり。『可笑しきわざをするもの哉』と、保清滑稽の人なれば、俳優の小舞を、枝押折て手に翳し、こゑおかしく諷ひ舞ければ、猿ども各枝をかざし舞けるありさま、興あることに猿ども余念なかりしかば、そのまに遁れ去んと拔足してにげければ、しばらくは知らで舞けるが、一匹の猿見付て、友よびつれて、又々追とりまきければ、いまは心身つかれ、いかんともすることなく、飢に及ければ、傍に落散たる木の実を捨《捨》ひ喰ければ、猿どものこらず木の実を枝より取りおとしてくらひける。夫にてやうく飢をしのぎ、其夜は、大木の下に臥しけり。数十の猿も保清をとりまき、うちかさなりて臥けるにぞ、

『行べき方もわかざるに、かく畜生の為にくるしめらるゝことよ』

と、すぐろ涙にくれけるが、夜もようくあけはなれければ、その所をたつて、なを東北のかたへ歩行ゆくに、猿もあとより付来ること、もとのごとし。されど命を絶ほどの猛獣にもあらざれば、少しは心を安じ、また五里ばかり歩行けるに、むかふの谷の方に犬のほゆる声しければ、今まで付歩行し猿ども、大におどろき、蜘蛛の子を散すのごとく、何国へ行けん、跡もあらず。保清やうく人心地して、

『あの犬の声なかりせば、わが身いかなる憂目を見んもはかりがたかりし』

と、心におそれ、猶も歩行けるに、向ふより獵人一人、牛のごとき犬を牽て来る。保清、

『扱は先程吼し犬はこれなるらん』

と、詠いたれば、この犬、保清にしなだれより、なつかしげにそばへ寄るにぞ、獵人不審して、

「旅人は何国へ通り給ふ人にや。かゝる道もなき所を歩行給ふ」

保清こたへて、

「されば、我は東北を志てゆく者なり」

獵人またいわく、

「東北とは何郡何村なるや」

保清、

「いやとよ、所を定めず、只東北へ行者也」

獵人おほひに笑つて、

「当所を定めず東北へゆく者とは、世にめづらしき人哉」と、貌をうち詠ける。保清も『この獵師凡人にあらず』と、

「されば、我は卜者なるが、東北に吉瑞あるがゆへに、何国と定めずゆく者也」

獵師またいはく、

「吉瑞とは宝を得たまふか。人を尋ね給ふか。また、禄を求給ふか」

保清こたへて、

「都の人を尋ぬるなり」

獵師、心には徹しけん、保清をつくぐと見て、

「もし、都人ならば、按察中納言殿の由縁にはあらずや」

保清大におどろき、

「いかにも其由縁のものなり。足下はいかなる人ぞ」

獵人謹而、

「某は土岐緑之助が家来、畑次郎正勝と申ものなり。ま

づく、我家へ来り給へ」

と、打運うちりて帰りければ、保清はじめて東北の吉瑞きずいを悟り、
正勝まさかつに伴ともなひ急いそげり。

安倍保清、緑之助に秘計を示す話

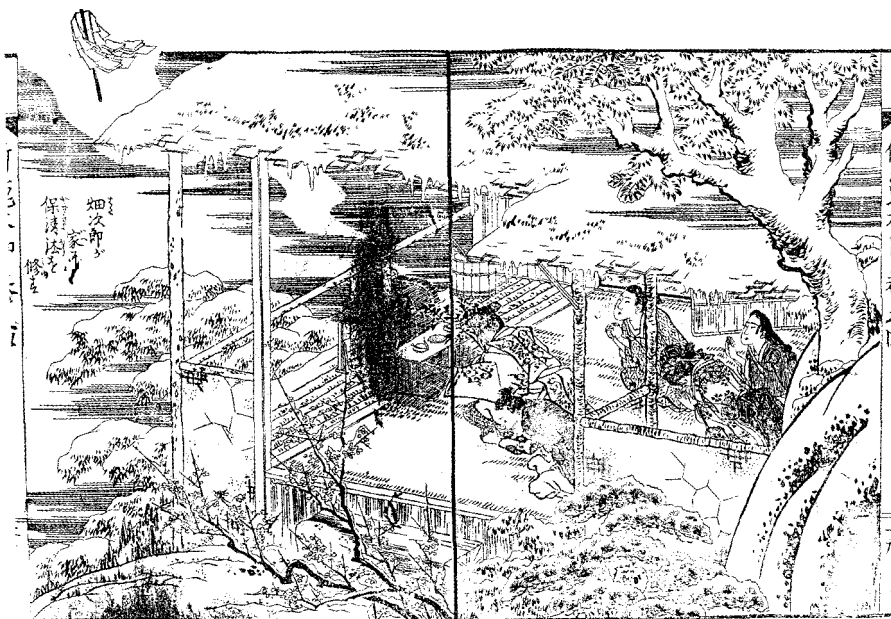
保清は畑次郎が家いえに来り、中納言どのの様子をかたりければ、姫君、緑之助どのもまろび出、父、舅のいたつきを案じたまふ。畑次郎は保清にむかひ、

「土佐丸が妖術、中々容易に退治なりがたし。土佐には伊賀寿兄弟の悪盗ありて羽翼うよくとなる」ことまでも語りければ、保清、

「さればこそ、われ密ひそかに宇和島の城内を（挿絵4）「畑次郎が家に、保清、法を修おす」伺うかひしに、妖魔の氣、城中に満々たり。これ容易のことにあらず」

と物語るうち、鞍手十内も他所より帰りて、保清に面会し、与左衛門淵の怪異を語りければ、保清も手をうち、

「扱さは猫の術しゅにてありけるか。誠に猫は千里の遠きを見透し、また、よく人の胸中このちゅうをする。此術を折くくには、黄蝶くわうてつ千匹、美酒に和くしてのましむる時は、其酒の醒さるまでは術をなすことあたわず。我われ又、一七日の間、妖魔降伏まがひの祈禱をなし、術をなすことなからしめん。又、竹篋たけせ太郎



挿画 4-⑤

を連れゆかんこと、決してなりがたし。此犬、城外まで
いたらば、猫は即時に遁去らん。しからばいつまでも土
佐丸を亡すことはかたかるべし。是をしらせざる術は、
虎皮に包む時は、其内をしるべからず。これ、虎は獸類
の長なれば、皮のうちを察することあたわず。しからば、
竹篋太郎を箱に入れ、虎の皮をもつてこれを包み、『献上
なり』と号して持行かば、土佐丸これを察することあたふ
まじ。是を謀らんものは畑次郎なり。其子細は、土佐丸伊
予の台にいたらざる以前に勘当ありしと聞ぬれば、宇和島
の城内に足下を見しりたるもの一人もあるまじ。我をも
いましめて、『都の間者を生捕たり』と縄かけて、其身は
土佐国伊賀寿兄弟が手下の者なりと偽り、右の箱もろとも
殿中へさし出したまへ。また、鞍手氏も一ツのはこにいれ、
これをも虎の皮をもつておほひ、『伊賀寿坊弁海、円海よ
りの献上なり』と披露せば、奸佞の土佐丸もこのうちを察
することあたふまじ。我いましめられてあるとも、彼等を
折じく呪を心にとなへなば、中々その謀をしるまじ』
と、流水のごとく述べれば、人々おほひに力を得、
「まことに此度足下を得ずんば、千年を経るとても大敵
を退治せんこと、おもひもよらず。猶もいにしへ、源

頼光朝臣、大江山の悪鬼退治の節、御先祖、安倍晴明、
一七日の祈禱をなしたまひて、終に目出たく退治ありしと
聞及ぶ。まことにこのたびは、神変の土佐丸退治のことな
れば、なにとぞ先例にまかせ、一七日の加持(加持)をなし
給われ」

と、緑之助、十内、次郎もろともねがひければ、保清も
『尤』と同じ、夫より一間に檀を飾り、丹誠をこらし
一七日祈りけるに、不思議や満ずる日、一ツの幣、檀上
をとび上り、虚空をさして宇和島の方へとびゆきける。人々
奇異の思ひをなし、『怨敵退治せんこと、掌にあり』と、
各も幣のとびゆきし方をふしおがみけり。

絵本竹篋太郎卷之四 終

「犬猫／怪話」竹篋太郎卷之五

栗枝亭鬼卯述

宇和島唐物屋佐右衛門が子息佐太郎、
桜狩に出て怪異にあふ話

こゝに宇和島の城下にならびなき豪家あり。唐物を翫ぐゆへにや、唐物や佐右衛門といへり。総領佐太郎は篤実なる性質にて、ことに風流の人にして、連歌はその頃都に名だゝる宗匠の門に入り、及ぶものなし。妹一人あり。名を御崎といひて、美形なれば、よの人心を動かし、婚姻のことをいひ入けるが、去々細ありて勘当しければ、いまは佐太郎一人となりしゆへ、両親のいつくしみ大方ならず、くらしける。

或年の春の頃、わかき人々誘ひ合て、桜狩せんと四人打連れ、その山、かしの峰とうかれ歩行、あるひは詩を賦し、歌を詠じければ、佐太郎は取あへず連歌の発句をかい付けり。

花おしとかこふ霞の笹かな

かく口ずさみて、籬、山奥に分入ければ、はや日も西に傾き、入相の鐘ほの聞へければ、佐太郎心付て、
「いかに旁。いま来し道も、およそ五里計山奥へ来りしとおもふなり。これより引かへしたりとも、人家までは二、三里も出ずんば、やどるべき所もなし。いかゞせん」といふにぞ、各心付て、

「いかさま、うか／＼と花にまどわされて来ることよ」

と、各、面を見あわせ驚し折から、むかふへ二十計の、いとうつくしき女の、日傘うちかたげて、其あたりの人とおぼしく、服紗つゝ、みを手に提て、静に歩行ゆくを見つけ、佐太郎言けるは、

「向ふへゆく女は、此あたりの人と見へて、旅の装もなし。然らば、此あたりに宿すべき家のあらんは必定なり。いぎ、近付てやどり求めん」

と、やう／＼にして追付、佐太郎、声をかけ、

「卒爾の申ごとに候へども、われ／＼は此山の桜狩にうかれ来て、帰らんとするに、はや日の西山に傾き候へば、せんかたなし。あわれ一夜のやどりをゆるし給はんや」と述べれば、かの女、会釈して、

「こは風流なる人々にて候。妾は人に宮仕するものにて候れば、私に御宿をかし申さんとも申がたし。主人に其旨申候はゞ、いかでうけ引申さゞることあるべき。先々、我身に付て来りたまへ」

といふに、四人の者ども蘇生せし心地にて、「よろしく頼まいらす」と、うち連れて、半里ばかりもゆくとおもへば、いと美々しくかまへし家居あり。門前に四人をまたせおき、彼女一人入けるにぞ、四人はそのあたりをうち詠

るに、扉重門いや高く、玄関には御簾うちかけ、さながら公家高家の御館といふべく、三葉四葉の殿づくりりに、いと不審し、

「かゝる鄙に見もし聞もおよばぬ家居は、いかさま狐狸の我々をまどわすにあらざんば、恐らくは仙境ならん」

と、四人囁くうち、かの女立出て、

「主に其よし申て候へば、『いたわしく候へば、一夜をかさせ給へ』と申候へば、こなたへ来りたまへ」

と、先にたつて行程に、幾間といふ数をしらず。庭には山をとりいれ、桜あまた植おき、算のしたゝり、楓の若葉紅をなし、こなたの泉水には夏待貌に杜若の盛りなるさま、目もあやに、しばらくイみければ、此女、

「こゝは端近なり。今〔挿絵5〕①唐物屋佐太郎等、さくら狩に替て怪異にあふ〕少し歩行たまへ」

と、猶も奥深く、金襴引廻したる坐しきに伴ひければ、同じ年頃十六、七計なる、うつくしき婦人の手々に饗応の品々をもち出、さまざまと山海の珍味にてもてなしけるに、四人はいかなるゆへをもしらず、只そことなくうかれ歩行しことなれば、空腹になりけるにぞ、かの珍味を悉く喰ひ尽し、酒などよきほどに飲て、浴し、暫休らいければ、



挿画 5-①

一人の婦人立出、

「主人、御目にかゝるべき旨申候」

といふにぞ、「いざ」とうちつれ、四人また幾間ともなく入れば、御簾所せくかけ廻し、雲潤縁の畳敷つめたる所に、「しばらく待たまへ」といひて、「客人来り給ふ」と音なへば、御簾まきあげし姿を見れば、六十計の老女、五ツ重ねの衣に緋の袴着たるが、脇息によりてありけるに、人々うちおどろき、思はず頭を下れば、主人笑つて、「人々は桜狩の道にまよひ給ふとか。やさしく面白く侍れ。こよひ、ゆくりなく此山にやどりたまふも宿世のゑにしならぬ。ゆるくと休み給へ。猶、側女どもに糸竹の調べをも申付なん。心置なく、つかれをも晴したまへ」と、御簾さし下りければ、四人は忙然と、「いかなる人ぞ」といふことをしらず、またもとの座敷へかへりぬれば、甘ばかりより十六、七までのうつくしき女ども、うち群れて弾つうたふつするさま、かの廬生が五十年の栄花もかくやと魂を天外に飛ばし、余念なく楽しみ、四人の人々はおもひくくに志あるかたに戯れごとひかくれば、心よくうけ引き、

「丑満の頃には、かならず参りなん。待たまへ。あだし心

もち給ふな」

といひて、皆々座敷うち片付、綾錦のしとねしきならべ、「後にこそ参るべし」といひ残して別れける。四人ひとつ所へよりつどひ、

「此家の主の体を見るに、正しく治承の頃、西海にて亡びしといひて、生ながらへし平家の一類なるべし。去にても奇異の所へ来り、百倍の興を添ぬることよ。猶、此上、丑満の頃は、いひかわしたる女ども来るべし」

と、枕引よせうち臥したるに、九ツとおぼしき頃、はじめ道案内せし女、手燭を携へ、静に開き、佐太郎にうちむかひ、

「主人、君に密に申たきことの侍れば、一人来り給へ」

といふにぞ、佐太郎、

「心得侍る。案内頼みまいらす」

と、彼女もろとも奥深く入れば、御簾まきあげ、已然の老女一人ありける。案内の女をも次の間へ立せ、佐太郎を膝元へちか付、いひけるは、

「君、此所をいかなる所とおもひ給ふや。伊与の国なる猫俣が嶽とて、猫の住家にて、側女と見へしも不残猫なり。君達四人の命も、網の中の魚にひとしく、逃るゝ道なし。

我は其猫の首領なり」

といふにぞ、佐太郎 魂もひるがへり、面土のごとく、懐々
《懐々》として声さへ出ずいたりしが、やうく貌ふり上、
「われくが命も今宵限りと承りぬれば力なし。されど、
我にかくしらせたまふは、いか成ことに侍るや」

老女こたへて、

「さればとよ。我はそもじどの祖母、佐左衛門どの、妻な
る人に、幼少より側に仕われし猫なるが、いまは国主の母
と仰がれ、栄花身にあまりぬれど、昔の恩をわすれず、か
くしらせ参らすなり。あなかしこ、我身のうへへ、人に沙汰
ばし仕給ふことなかれ。それゆへ、四人の衆の命は、我
助けまいらすべし。君の臥したまふ戌亥の隅の畳をあげ給
わゞ、抜道あり。下屋を東へさして走りたまふとき、少し
あかりのさすかたこそ、庭の築山なり。夫より藪垣を越、
川を渡り給わゞ、もはや猫の追こと叶わず。われ表向に
て人々を助たく侍れど、仲間の掟なれば、此所へ来るも
のを生てかへすべき法なし。丑満の頃までは程ちかし。は
やく逃たまへ」

といひ捨て入れれば、佐太郎、あまりの恐しさに足さへ
たゞず、やうくにして我寝間へ這帰ければ、三人の者

どもは寝もやらで、

「君は我等にしろせもせて、能恋をし給ふならん」

と戯るゝを、佐太郎ふるひ声にて、

「声ばし立たまふな。一大事なり。われに付て来り給へ」

と、乾の畳を押のければ、下家に穴あり。

「我にしかと取付たまへ」

といへば、三人の者ども、いかなる訳をもしらざれども、
一大事といふにおどろき、佐太郎に付て下家へ這をり、や
うく東へ向つて出ければ、少しあかりの見へけるに、嬉
しさいふばかりなく、築山の後へ立出、それより藪をこ
へ、只夢路をたどる心地して、あなたこなた行まどひぬる
に、一ツの大河あり。渡るべきやうもあらざれども、佐太
郎、三人に囁き、

「はやくこの所を渡らずんば命はなきぞ。早く渡れ」

と言まゝに、赤裸になり、浮つ沈つ、漸むかふの岸へ

およぎつく。跡より数十人の声して、

「こよひの獲物をとり逃しつることの口惜さよ。遠くはゆ
くまじ。追かけよ」

と、口より火焔を吹て、そこ爰と尋る様子に、三人の者
ども、はじめて変化に逢たることを悟り、足早に逃んとす

るを、佐太郎とめ、
「もはや此川をわたりたれば、氣遣なし。ゆるく支度をすべし」

と、着物など着るうち、むかひのかたは異形の者あらわれ、尋るさま、おそろしなれども愚なり。ほどなく夜もしらくと明わたれば、ありし金殿楼閣も消失、四人忙然と岸のあたりに行く。

このこと、佐太郎老人しるのみにて、三人はいかなる訳ぞとすることなく、夢のごとくおぼえけるとぞ。年経て、佐太郎物語りしによて、三人のまどひ解けるとなり。

細次郎、安倍保清を捕へて宇和島に赴く話
『文選』に曰、「勁松 韞 歲 寒、貞心 見 国 危」
といへり。

鞍手十内、細次郎は、微弱の緑之助を輔て、伊予土佐両国を呑で近国をも責随へ強大なる土佐丸、ことに妖術を行ひ、雲をよび雨をおこすの大敵を、兩人の外、力となるべき者もあらざるに、『兩國をとり返し、緑之助をふたゝび土岐家相続なさしめん』とおもひ立、心のうちこそ不敵なれ。

安倍保清が神変不思議の祈によつて、幣 宇和島のかたへ飛行ければ、『時日を移さず退治せん』とはかりけるに、かの竹籠太郎、十内を覆ふ虎皮あらざれば、『いかゞせん』と、大に心をいためける。

爰に細次郎が女房、御崎が親は、宇和島唐物や佐右衛門方なりりける。細次郎、勘気をうけて伊与へ来り、此佐右衛門方に食客となりてありけるに、娘御崎、次郎が男ぶりに執心して、人をもて言寄、終にわりなき中となりけるを、親佐右衛門これをしらず、同国の豪家へ嫁に遣はず相談なしけるを、母の物語に是非なく、先方へのいひわけに娘を勘当し、細次郎を追出しけるゆへ、松尾坂峠の傍に庵をむすび、夫婦くらし、獮人の業をなしけれども、母のかたより折ふしは心をつけ、不自由なきやうにはからひければ、家居など風流に住なしける。

この佐右衛門、唐物の問丸なれば、虎皮数十枚もちけるゆへ、御崎、夫にいひけるは、
「妾、父に不興をうけ候へども、母の方より心をつけたまわり候へば、父もさのみいかり給ふこともあるまじ。父の家には虎の皮数十枚ひめ置候へば、これを借りて謀をなし給わゞいかゞあらん」

と語りければ、次郎も十内もおほひに悦よろこび、

「汝なんぢ、よくも心付こころづたり。我等われらこゝろづかず、大おほに心配せり。いざや、汝なんぢを伴ともひ、佐右衛門方さへもんかたにいたり、このことを頼たのまんに違背いはすまじ。ことに、土佐丸とさまるが昔政かみせいにくるしむ時節ときせきなれば、実じつをもていはんにしかじ」

と、夫婦夫婦、宇和島うわしまに來きたり、母ははによりて勘当かんたうの詫わびを敷なげければ、約束よそなせしかたもいまは妻めかけを娶めとり、構かまひもあらざれば、年月としづきなつかしく思おもひ暮くせし娘むすめなれば、母はは大おほに悦よろこび、父ちちの佐右衛門さへもんに不興ふけうのことをねがひけるに、父ちちも次第しだいに年老としをへ、佐太郎さたろう一人ひとりにて心細こころこまく、こと更さら、次郎じらうは糸函いとむち正ただしき者ものにて、中々なかなか我婿わがむこなどになるべきものならねば、不興ふけうをゆるし、改めて婚姻こんいんの式しきをなしければ、佐太郎さたろうも妹いもうとを得えたるを悦よろこび。次郎じらう正勝せいせつ大おほに悦よろこび、舅おやぢ佐右衛門さへもんを一ひと間に招まねき、密ひそかに土佐丸退治とさまるたいぢのことをかたりければ、且かつ驚おどき、且かつ喜よろこぶ、

「虎皮こひのことは我庫わがくらに数十枚すじうまい納おさめられたれば、是これを与よへんはいと安やすしいへども、汝等なんぢら兩人ふたりにて、かく妖術まじなづかひを行おこなふ土佐丸とさまるを退治たいぢせんこと、危あやうかるべし。とくと思慮しりよくをなし、百戰百勝ひゃくせんひゃくしょうの謀はかりごとをなすべし」

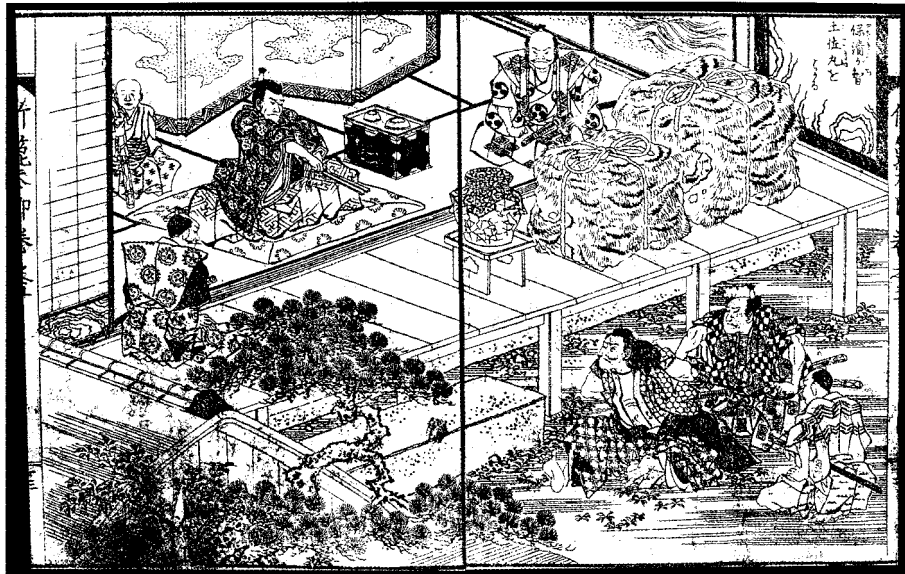
とさとしける。次郎じらう重かさねて、

「彼竹篋かのたけか太郎たろうだに城中じやうちゆうに入るならば、恐おそるゝに足たらず。かならず心を勞あつし給たまふな」

といひて、虎皮とらのかは十枚じゆまいをかりうけ、夫婦夫婦うち連つれかへりける。保清たへせい、十内じゆないは、「いかゞあらん」と案あなじ居ゐけるに、夫婦夫婦、虎皮とらのかはを携たづなへて歸かへりければ、大おほに悦よろこび、黄蝶わうてつ数千すせんをとり、美酒みしゆに和あひ、一陶ひとととなし、おほきなる箱はこ二ツをこしらへ、虎皮こひをもて包つつみ、用意ようい悉そまく備そなりければ、安倍保清あべたへせい自縛じじやくして十内じゆない、次郎じらう、竹篋たけか太郎たろうを引ひつれて、宇和島うわしまの城内じやうちゆうさして急いそげる。(推松おひま ②「保清が智、土佐丸をはかる」)

安倍保清、土佐丸が術を折く
竹篋太郎、母の仇を復する話

かくて土岐とぎの土佐丸とさまるは、威いを四国しよこくに震ふるひ、中国ちゆうこくをも切きしたがへ、実父じつふの本意ほんいを達たせんと心に悦よろこび、専せん、大望たいぼうの企くわなりけるに、「土佐長岡とさながの城代じやうだい、伊賀いが兄弟けいだいより献上けんじやうの品しな、并ならびにあやしき者もの一人、土佐とさの城外じやうがいにて捕候とらひゆへ擲取ちやくしゆ、これまた差上さしある」旨ね、則すなわち、手下てしやの棟梁とうりやうたる風早かぜはや八郎はちらうと申者まをすを差遣さしあはせ候まをす。旨ね、取次とりつぎまでいひ入いれる。土佐丸とさまる、呪文じゆもんをとなへ其虚実きよじつを伺きふに、げにも保清たへせいが術じゆつまさりけるにや、土佐とさの使つかひに相違あひだあらずとおほへければ、



挿画・5-②

直に呼び入れ対面するに、誠に勇士の骨柄なる男、大きな箱二ツ、美酒一陶、都人とおぼしきものを高小手にいましめて引すへたり。畑次郎、謹で、

「僕は伊賀寿坊円海が手下、風早八郎と申者にて候。主人兄弟、君の御恩恵によつて土佐の国を預り奉ること、難有存、虎皮十枚二箱、後室様へ美酒一陶、ならびに此ものは土佐の城辺を伺ふ曲者ゆへ、擲取ていろく拷問つかまつり候へども、いかなる者といふことを白状致さず。何様有論の者と存、これまた差上候」趣をのべて、平伏しければ、土佐丸おほひに悦び、

「伊賀寿兄弟が厚志、献上の品、満足せり。殊に都方の曲者を召捕し段、神妙なり。母への送りもの、満足也」とありけるうち、黄蝶酒の匂ひ、鼻をうがちけるにや、奥の亭より金輪御前立出、

「伊賀寿が壘志の美酒到来のよし、われ此程、鬱々としてあれば、美酒を賞翫して鬱をはらさん」

と、褥に坐し、おほきなる盃とり寄、数杯傾け給ふありさま、おそろしかりし次第なり。土佐丸、保清にむかひ、「汝、何者なれば、土佐の城辺をうがさぶ。都にてはいかなるものぞ」

と尋れども、只一言のいらへだにせず、さしうつぶいてありければ、土佐丸大にいきなり、

「汝、いか程白状せずとも、汝に見するものあり。三雲立仙に都の客を召連来るべし」

と、使を追々出しければ、程なく三雲立仙、中納言どのに繩をかけ引立て、御前に来り頓首して、

「只今、急の御召によつて、彼者を召連候」

と、傍にありける保清を見て、

「是は則、わが方に留置候客人同伴のものにて、一兩日逗留いたし、東北を心がけまいるよしにて別れて出候者なり。いかにして御手に入候」

と、不審がりければ、土佐丸よるこび、

「我眼力に違わず、按察中納言と同類の者ならん」

と、公善卿に向ひ、

「汝、内侍所の御鏡を奪ひかへさんと此所へ来り、はからず病により、三雲立仙が方に養れしよし。我、只今、汝等を切殺す者どもなれば、物語つて聞せん。抑、われは西園寺俊季が美子にして、父が叛逆をうけつぎ、王位に升らんとおもふゆへ、内侍所はとくより我方に奪ひおきたり。汝、立仙を篤実の人と思わんが、彼は腹心の者

にて、御鏡を預置たり。夫ともしらず、汝が本心をあかせし不覚者。笑ふに絶たり」

と、始めて始末を語りければ、中納言、大におどろき、

「扱は御鏡の盜賊は土佐丸なりけるよ。立仙を実意の人なりとおもひ、大事をあかしぬることの口惜きよ」

と、保清にむかひ、

「足下、東北に吉事ありと出行給ひて便なれば、いと案じたるに、豈はからん、賊手に落入給ひけるかや。かく我々、勅をうけてはるく、四国の地へ来り、本意なく害せられんことの残念さよ」

と、或は怒、あるひは歎き給へば、保清は自若として、

「人間万事塞翁馬なり。何ごともうれひ給ふな」

といひて、眼をとぢければ、土佐丸嘲笑ひ、

「汝等、籠中の鳥となりぬれば、せめて後世菩提をも願ひて極楽とやらんへゆくべし。立仙、両人のものども、息のねとめよ」

といひければ、立仙たちよりて、中納言にむかひ、

「これまで我を実意の者とおもわれしこそおかしけれ。
(挿画5—③「土佐丸滅亡」) 我は当家第一の忠臣にて、始より都人とおもひしゆへ、偽りてわが方にとめ置、工みの裏



挿画 5—③

をかきしなり。則、内侍所の御鏡を我に預給ふ程の者なることを、兩人ともしらざるか。いで、此世の暇とらさん」

と、懐よりとり出すは、刀にあらで内侍所の御鏡なり。錦の袋をおし開けば、光明四方へ照しけるに、不思議や、土佐丸、また沈酔せし後室むつくと起て、顔色土のことくになりけり。この時、保清、次郎にきと目くばせあれば、二ツの箱を押開く。内より竹籠太郎躍出、後室目が飛かゝるに、金輪御前仰天して、

「あな恐しや。竹籠太郎なりけるぞ」

と、逃まどひぬるを、追詰く追廻ぐれば、いまは金輪御前も正体をあらわし、年経る猫となりて、爪を立ていどみ戦ひければ、土佐丸、刀拔そぼめ、

「虎の皮をおほふて我術をくじぎしは、中々容易の人の及ぶところにあらず。此謀をなせしは何者なるぞ」

保清大に笑ひ、

「われは安倍晴明が後胤、安倍保清といふものなり。汝が妖術を折かん為、一七日祈禱をなしぬれば、もはや逃れぬ所なり。尋常に覚悟せよ」

と、縄引きつてつめ寄れば、土佐丸、立仙を呵つて、

「汝に内侍所の御鏡を預しは、我妖術の妨となるゆへなり。しかるに、今日此所へ持来り、我術を折く。はやく袋へ納むべし」

といひければ、立仙からくくと笑ひ、

「汝、我を真実の一味とおもふかや。我は羽州山形の城主、佐竹大炊の助が家来なり。我、天性似筆をよくするがゆへに、式部少輔どの、我を招呼給ひ、大師の真筆を似せ、汝にわたし、なほも汝等が陰謀を見頭すべしと付添居たりしに、妖術を得てより鏡を我にわたししたれば、我心中を鏡の徳によつて計ることあたわず、安々と御宝をうばひ返したり。覚悟せよ」

と、詰よれば、土佐丸大に驚き、

「立仙ばかりは無二の味方とおもひ、心をゆるせし残念さよ。いで、死物ぐるひに、何百人ありとも切死にせん」

と、打てかゝれば、鞍手十内、ひとつの箱よりあらわれ出、火花をちらして戦ひける。

此内、猫と竹篋太郎は、爰の隅、かしの詰りに追つめ、喰あふありさま、おそろしななども愚なり。難なく竹篋太郎、猫を喰伏、喉笛にくひつきて一振ふるよと見へしが、流石の悪獸もよわり果、傍に伏しぬれば、太郎は大にう

れしげに飛上りく、終にくひ殺しける。

其ひまに鞍手十内、畑次郎、土佐丸に討てかゝれば、『兩人の敵、まづ一人を仕留ん』と、畑次郎に手早く手利剣をうち出しける。兼て心得しことなれば、己前の箱をもて請留、其手裏剣を見れば、己前の割筭なり。

『扱は案にたがわず、親の敵は土佐丸なり』

と、獅の勢をなして切てかゝれば、土佐丸、兩人の勇士に敵しがたく、ニヶ所の大疵をうけて、かつほと伏ければ、次郎躍あがつて、

「親の敵、思ひしれ」

と、終に留をさしける。

此内に家来どもおどろき騒ぎ、「太刀よ、鎗よ」とひしめくを、竹篋太郎無二無三にくひたつれば、大勢の家来なれども、恥を知たる土一人もあらばこそ、只欲に迷ひての味方なれば、一匹の犬にくひ立られ、追手をさしてにげ出、何国ともなく落行ける。

夫より城中を見分するに、後室の閨の辺りは、爛し肉、乾ひたる骨累々として、臭気絶がたし。おほくの姫ども、『けふや喰殺されん。翌や我身の上ならん』と、安き心もなく暮せしに、後室終に竹篋太郎に喰殺されければ、悦

こと限りなし。

夫より金花の短冊を宝蔵よりとり出し、

「三ツの宝揃ひぬるうへは、はやく土佐の城を平均すべし」

と、公善卿、兩人にのたまへば、立仙進み出て、

「某、年来悪漢となつて付添候ゆへ、伊賀寿兄弟にも、

かねて土佐丸、立仙を『忠臣なり』と風聴せしことなれば、

各を伴ひ土佐へ赴き、謀をなし、伊賀寿兄弟を亡した

まへ」

といひければ、鞍手十内手を打て、

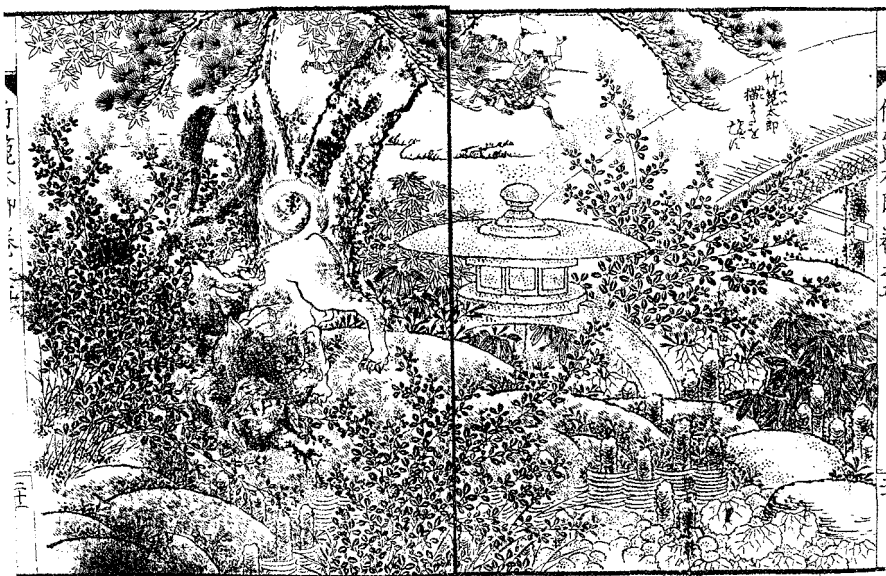
「妙策、く。時をめぐらし(挿画5—④)「竹尾太郎、猫またを亡す」

たまふべからず」

と、即時に打連、土佐の国、長岡の城へいそぎける。

伊賀寿坊兄弟滅亡の話

かくて伊賀寿坊円海、舎弟弁海、土佐の国、長岡の城
に入て、土佐一国を我物となし、豪家へは理不尽に入込、
金銀を掠めとり、「領主の仰なり」といひければ、一国の
騒動大方ならず、金銀を穴に入れ、あるひは山林に身をか
くして世の有様をかゞひける。伊賀寿藤太も、海賊をな
して奪ひとりし金銀を土佐の城中へいれおき、其身も手下



挿画 5—④

少々引つれ、長岡の城へ引うつり、兄弟三人、長岡の城主の心地して、奢りにふけり、美女を集め、淫酒に日夜をわかず、廬生が榮花をぞなしける。

此時、三雲立仙は、鞍手十内、畑次郎を雑兵のごとく出立せ、其身は馬に鞭打て、土佐の城へ走付、「門を開け」と呼わりければ、門番「何者ぞ」と咎ける。立仙声を上、「伊予の国より早打に来たものなり。伊与の大変を城代に直に申さんと来りたり。はやく門を開くべし」

と呼わりければ、門番おどろき、伊賀寿兄弟にかくといひければ、弁海、心利たる者なれば、櫓に立出、其人を見れば、土佐丸が近臣三雲立仙、殊に供は兩人と見ゆれば、心を安んじ、門を開き内へ入ければ、十内、次郎も立仙に随ひ、次の間に叩へ、伊賀寿兄弟たち出で、

「火急の注進とはいかなることぞ」
と尋ければ、立仙息つきあへず、

「竝も伊予の宇和島の城へ、当城よりの使者風早八郎と名乗て、『虎皮十枚、美酒二陶獻上なり』と披露して、土佐丸の御前へ近寄、箱を開けば、竹篋太郎といふ犬、鞍手十内といふ勇士、二ツの箱よりあらわれ出、後室金輪御前を竹篋太郎くひころし、かの風早八郎と名乗しものは畑次

郎正勝とて緑之助の旧臣、鞍手十内とひとつになり、終に土佐丸を討とり候ゆへ、われ、このことを見るより取物もとりあへず注進に参りたり。御用心あるべし」

と、吐息繼で述べければ、伊賀寿兄弟おほひに驚き、忙れ果てありけるが、

「土佐丸、容易の大将にあらず。いかで、かく謀をしらざる」

立仙こたへて、

「元猫のなす術なれば、虎皮のおほひたる内を察することあたわざる故なり」

と、聞て弥、仰天して、

「其兩人、いかなる英雄なるぞ」

といひければ、次の間より兩人おどりと出、

「鞍手十内、畑次郎とは我々がことなり。十内は先達而、伊賀寿坊には手並を見せ置たり。いざ快よく首をわたせ」

と、各抜つれ、切てかゝれば、おもひよらざる三人、大に周章、一間へ逃入んとする所を、正勝はやく弁海が腰のつがいを切はなす。是、則、保清が謀にて、「弁海逃のびて術をおこなわぬ、容易に亡すことかなひがたし。はやく弁海を切べし」といひけるゆへ、矢庭に切倒しける。

藤太いかつて、

「弟のかたき、逃すまじ」

と、次郎にわたり合ける。

伊賀寿坊円海は、得たる鉄棒とる間もあらざれば、

大太刀を抜もち、十内ほうつてかゝり、兩人火花を散らし

て戦けるにぞ、手下の賊ども、「こは何事ぞ」と狼狽騒

ぐを、立仙、傍にかけたる長刀、水車にまわし飛かゝれ

ば、手下の者ども肝を消し、逸足出して逃出ける。

藤太は眉間へ初太刀を切込、眼に血流れて働くこと

あたわず、次郎「得たり」と、踏込、終に切伏ければ、

伊賀寿坊これを見て大にいかり、

「兄弟の敵なり」

と、獅子のあれたるごとく切まくりければ、次郎かけあわ

せ、兩人討てかゝるを事ともせず、右に払ひ、左にうけ、

しばし戦ふといへども、十内が英雄、なじかは敵すべき、

から竹割になり、二ツにわかれて死したりける。弁海は死

もやらず這まわるを、次郎たち寄、留をさし、藤太が首

をうちおとし、勝鬨をあげければ、手下の賊ども、ある

ひは討れ、或は降参してありけるを、一々切ならべ、伊

与土佐兩國の城を、兩人の英雄、暫時に切しづめたりし

勢、寔に、一騎当千とは此(播磨)⑤(土岐)家、万歳を唱ふ)人々のことならん」と、各、舌をぞ巻にける。

土岐緑之助、再び兩國を収む

内侍所の御鏡、都へ入らせ給ふ

伊与の猫塚の話

かゝる所へ、緑之助、百世姫・橋立・御崎もろとも伊予

へ来かゝり給ふ途中にて、中納言どの、保清にゆきあひ給

ひ、絶て久しき対面を悦給ひ、「土佐の様子氣遣し」と、

夫よりうち連れ、土佐の城辺へ来り給ひしに、はや伊賀

寿兄弟をうちとり、残党不残うち亡したるよし聞へけれ

ば、人々おほひに悦給ひ、やがて城中に入給ひ、三人

の英雄を称したまへば、各、兩國の静謐を賀し、暫

逗留あり。

中納言、保清、緑之助を伴ひ、都へのぼり、此事奏聞

ありければ、叡聞に達し、大に感じさせ給ひ、「早速

内侍所、都へ帰らせ給ふも土岐の忠節ゆへなり」と、緑

之助を少将になされ、伊与土佐兩國、元の如く領すべき

旨、宣旨ありける。「鞍手十内、畑次郎が働、拔群なり」



挿画 5-⑤

とて、十内を伊賀守になされ、畑次郎を志摩守になされ、立仙にも禄あまたたげれば、百代姫と改めて婚姻ありけるにぞ、土岐家の繁昌、日にまし、伊賀寿兄弟が数万両たくわへおきし金銀を蒼生に施し給へば、民の悦おほかたならず、鼓腹して万々歳を祝しける。

唐物や佐右衛門も、このたびの忠節を称して、ながく扶助したまへば、悴佐太郎、一旦猫のなさげによりて助命せしことをおもひ、彼俣猫の死骸をこひうけ、塚を築、伊予の猫塚とて、いまもありけるとぞ。

竹篋太郎はその場より何地へ行けん、所をしらず。これなん、犬なりや、神なりや。

繪本竹篋太郎卷之五 大尾

(刊記)

文化七年庚午孟春発兌

江戸書林

西村 源六

京都書林

伏見屋半三郎

大阪書林

勝尾屋六兵衛

山田屋嘉右衛門

富田屋清藏

秋田屋太右衛門

文化七年庚午孟春發兌

江戸書林

京都書林

大阪書林

西村源六

伏見屋半三郎

豚尾屋六兵衛

山田屋嘉右衛門

富田屋清藏

秋田屋太右衛門

刊記



翻刻『犬猫／怪話』 竹篁太郎

二〇〇九年三月三十日 印刷

二〇〇九年三月三十日 発行

（二〇〇八年度 尾道大学）
（学長裁量教育研究費による）

尾道大学 芸術文化学部 日本文学科

近世文学原典講読ゼミ

（藤沢 毅 編集）

〒七二二―八五〇六

尾道市久山田町一六〇〇番地

○八四八―三二八三一（代）

印刷・製本 大東印刷株式会社

〒七二二―一〇一四

尾道市新浜一丁目一四―三二

○八四八―三一九八八九

（非売品）

